



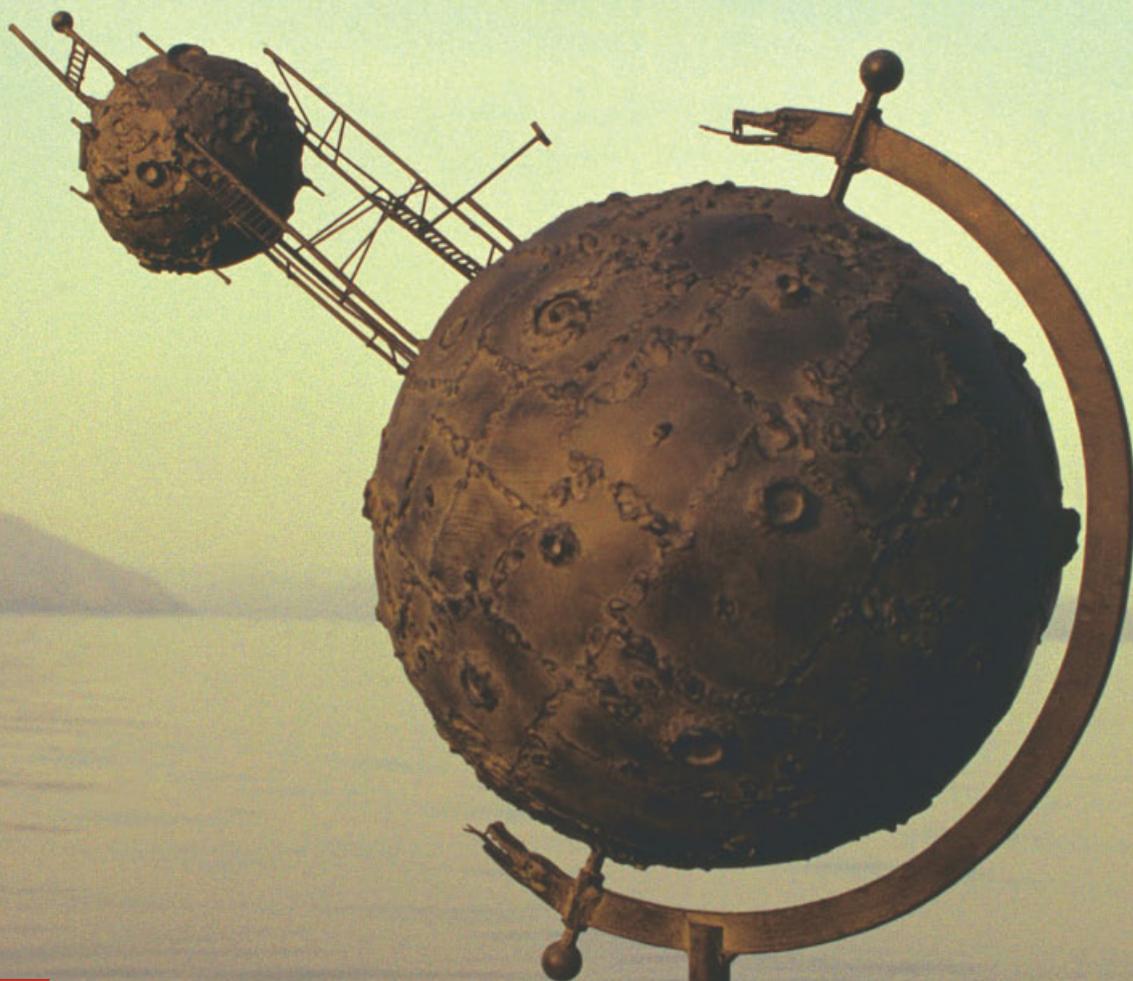
Hitotsubashi
Quarterly

夏号

July 2010 Vol.27



Captains of Industry～知と業(わざ)のフロンティア



進化する大学

加速する

一橋大学の国際化

関一
Captains

連載企画

神谷昌利氏

《特集》
地球の風 地域の風
やちや酒造株式会社
代表取締役社長

長谷部徹氏

作・編曲家
個性は主張する

《連載企画》
商学研究科准教授 山下裕子

河口真理子氏

《対談》
一橋の女性たち
大和証券グループ本社CSR室長

新制大学が継承する
三商大の伝統

新企画

一橋大学長 杉山武彦

伊賀健一氏

《対談》
日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？
東京工業大学長

巻頭特集

日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

【対談】

東京工業大学長／伊賀健一氏
杉山武彦学長

「知」と「業(わざ)・技」を磨く原動力は「志」
その隠し味は「和」

1

特集
進化する大学

新任者メッセージ

7

加速する
一橋大学の国際化

学長が先頭に立って

国際化を推進する体制を構築

12

25年にわたるタイの学生受け入れで

蓄積したノウハウが国際化に弾みをつける

16

世界の著名学者2名・若手研究者6名が示した
学園グローバル化の必然性

18

研究室訪問 chat in the den

法学研究科准教授／杉山悦子

国際企業戦略研究科教授／岩倉正和

22 20

新企画

三商大ゼミ60周年、
三商大戦50周年を記念して、
新たな絆が生まれた

新制大学が継承する三商大の伝統

24



57



46



43



37



34



28



1



連載企画

Captains

大阪市民に愛された学者市長 関一
理論と実践の融合で近代大阪の骨格をつくる

28

連載企画

一橋の女性たち

【対談】

大和証券グループ本社CSR室長／河口真理子氏
商学研究科准教授／山下裕子

34

連載企画

個性は主張する One and Only One

作・編曲家／長谷部 徹氏

37

Love of Culture

ガーデニング

風刺画の世界に魅せられて

44 43

Book Review

「直感に反した洞察の達人」に見る洞察の妙

45

特集

地球の風 地域の風

やちや酒造株式会社 代表取締役社長／神谷昌利氏

46

Campus Information

◆一橋大学基金ご寄付者のご芳名

52

◆平成22年度一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館
共同企画展示のお知らせ

54

◆兼松講堂にレジデントオーケストラが誕生。

55

◆10月24日、初めてのコンサートを開催します

55

◆2010年8月15日 BS日テレにて、

56

◆一橋大学を紹介する番組を放映します

56

◆「二橋大学公式記念焼き菓子」の販売を実施しました

56

◆第2回 キャンパスの中の知らない風景

57

◆「シャンデリアの化粧直し」

57

◆第6回 一橋大学関西アカデミア開催のお知らせ

58

◆第1回 一橋大学中部アカデミア開催のお知らせ

58

日本のリーダーが語る世界競争力のある人材とは？



東京職工学校以来129年の伝統を誇る東京工業大学と商法講習所以来135年の歴史を有する一橋大学。

科学技術系と社会科学系とで教育研究分野は異なるが、それぞれの分野で国内トップと称され、産業界への人的貢献や同窓会組織の充実、大胆な研究組織の再構築など、共通するところも多い。

両学長の対談から、「工」と「商」の本質は案外近いもののようにも思える。

東京工業大学の伊賀学長、一橋大学の杉山学長に、これから両大学が進む方向性について語ってもらった。

伊賀健一氏

一橋大学長

杉山武彦

「知」と「業(わざ)・技」を磨く原動力は「志」
その隠し味は「和」

合同移動講座で

「ものづくり」を語る

杉山 2009年11月に、東京工業大学の蔵前工業会と一橋大学の如水会の主催で、「ものづくりと日本経済」をテーマに合同移動講座を開催しました。両大学の同窓会による初めての試みでした。当日は大変盛況でしたね。

伊賀 「ものづくり都市」の浜松が会場でしたが、一橋大学と東京工業大学の同窓会による合同主催で

したので、お互いに負けてはならじと、それぞれのルートを使って宣伝した結果、700人を超える方々にご参加いただくことができました。地元のスズキ株式会社の鈴木修会長兼社長にも来ていただきましたが、あれだけのことをするのは、なかなか大変なことでした。

杉山 「ものづくり」について、それぞれの大学の立場から話をしたわけですが、一橋大学は「ものづくり」というより、その仕組みやサービスを扱う社会科学系の大学なので、どのような話をすればわかりやすいのかについて悩んだのを覚えています。私は

物流関係が専門ですので、具体的な事例を含めながら話をさせていただきました。

伊賀 私の専門はエレクトロニクス分野で、レーザーや半導体といったものづくりにかかわっています。そこで、エレクトロニクスとものづくりについて話をしてから、大学の在り方などの話をしましたが、実は私も困っていたのです。「ものづくり」といっても基本的には大学で研究している範囲しかわかりませんので、産業界の人を前にして「ものづくり」



については、多少躊躇がありました(笑)。それにしても、両大学の同窓会は非常にいい意味で競争しており、大学がこのような強固な同窓会を持っているというのは、珍しいことですし、本当にすばらしいと思います。

第1期中期目標期間は、 活性化と疲弊の6年間だったか？

杉山 さて話は変わりますが、現在、第2期中期目標・中期計画に基づいて教育研究を進めているところだと思いますが、第1期を振り返ってみての感想はいかがでしたか。私が印象的だったのは、日本経済新聞に黒木登志夫前岐阜大学長の国立大学法人化第1期を振り返っての記事が載っていて、その見出しが「活性化と疲弊の6年」だったことです。「活性化」と「疲弊」というと相矛盾するようですが、多くの大学がこのような気持ちだったのではないのでしょうか。



伊賀 ポジティブな面では、その「活性」ですね。国立大学時代にはできなかったことが、運営面でするようになります。例えば、東京工業大学とその同窓会である蔵前工業会が資金を積み立てて一緒に会館を建てることができました。研究面でも、研究費などの経費の枠組を大学の裁量で組めるようになりました。このように柔軟に運用できるようになったのは、大学にとっては大きなメリットで、発展のチャンスが広がりました。

「疲弊」ということについては、「疲」れてはいませんが、「弊」ではない、つまりぼろぼろにはなっていないと思います。運営費交付金が毎年度減額されるのはこの大学にとっても大変です。しかし

一方では競争的資金が増えているので、大学全体としての予算は増えています。また、学長自らがヒアリングに臨み話をするような機会も多くなっており、このことも大学のプレッスを高めるとい意味ではいいことだと思います。

東京工業大学の教員に、なぜ疲れているのか聞いてみると、かなりの労力が学会などの世話に費やされていることをあげます。学術・研究におけるコミニティ組織を維持するための学会運営は不可欠ですし、若手研究者の育成もしていかなければなりません。また、大学の研究が大規模化していることも一因かもしれません。東京工業大学では、現在グローバルCOE^{*1}を9件獲得し、学内のほとんどの研

究分野をカバーしており、アクティブな人ほど忙しくなっています。「忙しい」という漢字は、「心」を「亡くす」と書きますが、私は毎日ごろから多用であっても多忙ではないと言っています。研究は楽しくやるものです。

杉山 一橋大学でも同じように、忙しい人がより忙しくなるといった状況になっています。競争的資金のウエイトが高くなってきてからなおさらです。また、伊賀学長が言われるとおり、力のある大学は運営費交付金が減っても競争的資金が獲得できるので、総額でいえば以前より予算は多くなるかもしれません。しかし、競争的資金は基本的に研究等のために使うわけですから、大学運営の基本的な部分で必要な経費の

杉山武彦 (すぎやま・たけひこ)

1968年一橋大学商学部卒業、1970年同大学大学院商学研究科修士課程修了、1974年同大学大学院商学研究科博士課程単位修得退学。1974年成城大学経済学部専任講師、1977年一橋大学商学部専任講師、1980年同大学商学部助教授、1986年同大学商学部教授。その後、商学部長、副学長を歴任し、2004年12月一橋大学長（現在に至る）。専門は交通経済。

伊賀健一 (いが・けんいち)

1963年東京工業大学理工学部電気工学課程卒業、1965年同大学大学院理工学研究科電気工学専攻修士課程修了、1968年同大学大学院理工学研究科電気工学専攻修士課程修了。1968年東京工業大学助手、1974年同助教授、1984年同教授。1979年～1980年ベル研究所客員研究員兼務。その後、同大学精密工学研究所長、附属図書館長、2001年～2007年日本学術振興会理事を歴任し、2007年東京工業大学長（現在に至る）。専門は電子工学、特に光エレクトロニクス。



伊賀学長自ら学内を案内してくださいました。

*1 文部科学省の研究拠点形成費等補助金事業



「monotsukuri」の 未来を担う 人材を育成する

杉山 国立大学法人化で、事務職員の仕事に対する考え方が変わってきています。積極的に動こうという気運が高まってきています。このことも、法人化の大きな成果だと思っています。

伊賀 そうですね。大学院大学化を推進していたこともあり、東京工業大学は国立大学法人化する少し前から事務組織改編の準備をしていました。研究科ごとに独立していた事務局を改編して、集中的に事務をやるようにしたのです。例えば、研究戦略室を立ち上げて、競争的資金への応募などの際に、各研究科の教員と職員が集団で対応できるようにしました。広報室も同様で、教員と職員がいっしょに議論する場をつくりました。しかし、事務組織改編については陰の部分もあって、現場が多少手薄になっているのは否めません。それを、少しずつ変えていってほしいところです。

やりくりは大変です。そこが辛いところですね。先日、如水会で話をする機会がありまして、この6年間を振り返って「競争と評価」の時代であったということを説明しました。如水会の会合に集まるのは私よりも先輩の方々が多く、私などは本当に若いほうです。終わってからある大先輩に、「いろいろやってきたと言っていたが、正確にはやらされたのではないか」と言われました。確かにやらされたというのも事実かもしれませんが、そのことを大学の研究や教育に良い方向でフィードバックできればいいわけですから、被害者意識を持つことはないと思っています。

伊賀 おっしゃるとおりです。一時期、「させていただきます」という言葉がはやりましたが、「させられた」という言葉の裏返しだと思っています。教育や研究は強制的に「させられる」ものではなく、社会や国民のために「させてもらっている」ものです。プロフェッショナルとして、国民のためにこのような仕事をさせていたいただいているという見方も必要だと思います。

杉山 大学の使命は教育と研究ですが、特に「教育が責務である」という期待が、法人化以降、一段と高まってきたように感じます。一橋大学には、キャブテンズ・オブ・インダストリーというスローガンが以前からあります。いまではこれに、「知と業(わざ)のフロンティア」というキャッチフレーズを加えて使っています。東京工業大学では「時代を創る知・技・志・和の理工人」と言っていますが、どのような人材を世の中に送り



日本のリーダーが語る 世界競争力のある人材とは？

出していくことを使命とお考えですか。

伊賀 東京工業大学は1881年の建学で、ものつくりを担う人材を育成することが建学の精神です。壁に掛かっている歴代学長の肖像画の左から2番目が手島精一校長で、日本の工業の祖といわれています。福沢諭吉の『学問のすゝめ』同様に、「産業のすすめ」を説いた人物です。その考え方は現在まで脈々と伝わっています。実際に、第一次産業の農林水産業から第二次産業の鋳工業に産業の重点が移ったところから、東京工業大学の卒業生が工業を担う人材として活躍してきました。今では、第三次産業として情報化の分野にも活躍の場が広がっています。ものつくりを中心に置くという東京工業大学の精神は変わっておりません。

学内でいろいろと議論して、「ものつくりの未来に向けた使命感」こそが東京工業大学の根元であることを認識したうえで、昨年、東京工業大学将来構想「東工大ビジョン2009」を打ち出しました。今では、情報やバイオテクノロジー、また、ソフトウェアや新しい無形のものを含めてものつくりと考えるようになっていきます。杉山学長のご専門である流通や交通なども対象です。また、東京工業大学では、早い時期から経営工学や金融工学にも取り組んでいます。

杉山 私が一橋大学の大学院生のころ、東京工業大学の松田武彦先生(元学長)の研究室の大学院生の方々と交流しましたが、経営学の勉強を私たち以上にされておられるので、ビックリしたことを覚えていています。

ところで、このようなビジョンを紹介する際に、「ものつくり」は英語で何と言っているのですか。

伊賀 いい表現がないので、「monotsukuri」



とそのまき言っています。「manufacturing」では日本人がものづくりに込めている深遠な魂のようなものがなかなか伝わりません。

杉山 確かにそうかもしれません。また、情報などを含めてものづくりを考えていくと、「manufacturing」では納まりませんね。

伊賀 アメリカに一年半ほどいたとき、「Friday-afternoon experiment」という言葉を知りました。金曜日の午後5時になると、たとえ仕事が途中で帰ってしまおう。月曜日の担当は別の人のなので、ネジが締まっているかどうかわからないまま車をつくるというのです。そのようなことではいけない。東京工業大学では、根元的なものづくりを目指そうとしています。

「キャプテンズ・オブ・インダストリー」と「時代を創る知・技・志・和の理工人」

杉山 スローガンに話を戻しますが、この「知・技・志・和」に込められた思いについてお教えください。



伊賀 「知」は知識や知性で、「技」は東京工業大学の本分である技術を指します。そこにはやはり高い「志」が必要で、これに日本古来の和の精神を示す「和」を加えました。中西進先生の著書^{*2}に教えられたところが大きいのですが、聖徳太子は十七条の憲法の中で「和をもって貴しと為す」と言っています。これは、悟りを開いていない者同士が言い争うことは無駄であり、それを承知のうえでいろいろ議論を戦わせて、最後には和をもって収めるということですが、聞いた瞬間に「これだ！」と思ったので4つになってしまいました(笑)。

学生にこのスローガンのことを聞いてみると、この「和」がすごくいいと言うので、付け加えてよかったです。



杉山 一橋大学のスローガン

にも「知」と「業(わざ)」は含まれていますし、「志」はそもそもキャプテンズ・オブ・インダストリーという言葉に思いが込められています。この言葉は、19世紀のイギリスの思想家にして歴史家であるカーライルの本に記されています。産業革命後の営利に走る経営者の存在を見ながら、これではだめだと考えて、社会のために役立つ高い志や高貴な騎士道精神を兼ね備えた経営者や産業家をキャプテンズ・オブ・インダスト

リーと表現しました。しかし、「和」についてはあまり意識してきませんでした。それだけに、印象深くお話を伺いました。

伊賀 「知・技・志・和」を教育の基本に据えて、いかに実行していくかが重要になります。

縦割りに横串を刺す 両大学の全学横断的な研究体制

杉山 「東工大ビジョン2009」の核になるようなものは動き出しているのでしょうか。

伊賀 組織にとらわれない全学横断的なものが二、三動き出しています。例えば、環境エネルギー機構がそれです。本学の教授、准教授約800人のうち、エネルギーや環境を研究している220人が参加登録している組織で、環境エネルギー分野において大学としてどのような貢献ができるかを研究しています。ここには社会科学であるとか、また、地球科学といった理学系も含まれています。これから建築する新エネルギー棟が、その中核施設となります。

杉山 一橋大学でも同じような考えで研究に取り組んでいこうとしています。一橋大学には、学士課程を有する研究科として商経法社の4研究科がありますが、これらを横断する研究体制作りをしているところでは、つまり、社会科学全般を対象として、縦割りではなく横断的に研究を進めていき、併せて大学の研究を可視化していくという試みです。現在、「グローバル化に対する経済・社会の対応」、「環境・資源問題への経済・社会の対応」、「人口構成(年齢階層、文化、国籍等々)から生じる問題群への経済・社会の対応」という三大テーマを掲げております。人口構成の問題でいえば、国や人種、また、宗

教などがありますし、一つの国の中でも若年者層と高齢者層といった世代間の違いもあります。方法論としては、「高度な統計的実証分析」と「総合的地域研究」の2つを挙げそれを基本として3つのテーマを進めようとしています。この研究科横断的な機能を補強するのが、「一橋大学研究機構（仮称）」構想です。この機構は、各研究科内で進められている各種プロジェクトのサポートをするとともに、研究内容を広く世の中に情報発信し、「一橋大学の研究」とはどのようなものを皆さんに知っていただく、つまり可視化することを目的としています。

理系と文系とで違うから意味がある 社会科学へのアプローチ

杉山 大学改革の進展の中で、大学の個性化が問われるようになってきました。大学における7つの機能別分化^{*3}に関して、その中からどれを選ぶかという話も登場しました。一橋大学としては、(1)世界的研究・教育拠点であるとか、(2)高度専門職業人養成があげられると思いますが、実際上はこの2つでは足りなく、(4)総合的教養教育も必要だし……と悩んでいるところでは、東京工業大学では、どのようにお考えですか。

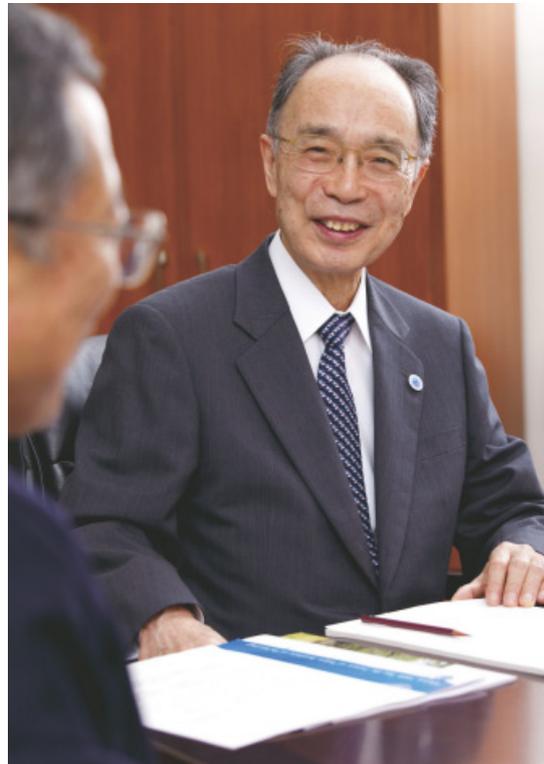


伊賀 7つの機能別分化でいえば、東京工業大学の位置付けは、(1)世界的研究・教育拠点であると思います。しかし、それだけでは足りず、まずその前にゼロ次元のものとして、「志」^{mission}が必要ではないかと思



日本のリーダーが語る
世界競争力のある人材とは？

います。実は学長になる前、私は委員としてこの「大学の機能別分化」の区分けを検討していましたが、これでは少し足りないと感じておりました。大学の機能を分けて特徴があるように並べるのはいいのですが、



ヒモで吊して順番を付けることには疑問があります。

杉山 一橋大学は、社会科学という領域に特化している小規模な大学です。しかし、社会科学を前面に出しながら、科学技術の在り方や進め方にも指針を与えていくような意気込みを持っています。一橋大学には科学技術的な蓄積はありませんが、科学技術サイドからは、社会科学に対して期待する面もあるかと思えます。せっかくの機会ですので、伊賀学長が社会科学、あるいは一橋大学に期待すること、また要望などの率直なご意見をいただきたいと思えます。

伊賀 理工系の大学では、社会科学を違う面から見て、産業界構造も変わってきています。こうした社会

の変化を認識して技術を学んでいくことは非常に重要で、また避けて通ることはできません。そこで、経営学や経済学、また、法学や歴史学といった学問を学び世界観を身に付けていくことが重要になってきます。それだけに、これらを専門に研究している大学は頼りになります。四大学連合^{*4}のお陰で、約100人の東京工業大学の学生が一橋大学で講義を受けています。

杉山 東工大の学生はかなり一橋大学に講義を受けに来てはいますが、一橋の学生で東工大に出かけていく学生の数はあまり多くありません。やはり文系の学生が理工系の勉強をしようとするほうが難しいという面があるように思います。

伊賀 イメージ的にはそうなのかもしれませんが、現在、専門だけでなく広く教養を学ぶような仕組みをつくらうとしております。また、1年生向けの専門科目は非常にやさしいところから始めますので、文系の学生にも学びやすいと思います。あとは専門が何であれ興味を持ってもらえるのが、世界文明センターの講義です。ここでは、文学や美術、また、音楽などの講義をオープンにしています。

杉山 四大学連合の中核大学として、これからも共に刺激し合っていければいいと思います。

*3 平成17年度の中央教育審議会答申

- で示された大学の機能別分化
- (1) 世界的研究・教育拠点
 - (2) 高度専門職業人養成
 - (3) 幅広い職業人養成
 - (4) 総合的教養教育
 - (5) 特定の専門的分野
(芸術、体育等)の教育・研究
 - (6) 地域の生涯学習機会の拠点
 - (7) 社会貢献機能
(地域貢献、産学官連携、国際交流等)

*4 研究教育の内容に応じて連携を図ることで、新しい人材の育成と学際領域、複合領域の研究教育の更なる推進を図ることを目的として、2001年3月に東京医科歯科大学、東京外国語大学、東京工業大学及び一橋大学で結成。

新任者メッセージ

新任経営協議会委員

株式会社大塚家具代表取締役社長／大塚久美子氏
岡村綜合法律事務所／北尾哲郎氏

新任監事

フェニックス・キャピタル株式会社取締役／渡邊 彰氏
新日本有限責任監査法人常務理事／二村隆章氏

新任研究科長・大学院長

法学研究科長／村岡啓一
言語社会研究科長／糟谷啓介
国際企業戦略研究科長／クリスティーナ・アメージャン
国際・公共政策大学院長／高橋 滋



研究・教育と 効率化・成果主義のバランス

岡村綜合法律事務所

北尾哲郎氏

Tetsuro Kitao



私の出身大学では、国立大学法人化以降は寄付集めに熱心になり、ホームカミングデーや広報誌の発刊など、大学の現状を広報する努力をするようになってきました。その背景には、どうも文部科学省の「大学も、効率的経営、成果主義を取り入れることが重要であり、財政的にも自主性を求める」という方針があるようです。

大学の運営や教育内容にはこれまで関わったことがありませんが、私は、大学にとっては研究と教育が両輪であるべきだと考えています。ところで、教育の成果はなかなか目に見えませんが、研究も腰を据えて息長く続けて初めて成果が出るというものもあるでしょうから、効率や成果主義とは相容れない側面が色濃くあります。さらに、国立大学には、学

費などの経済的負担をはじめとする学生の待遇について、私立大学とは違った有り様があつてしかるべきだと思つています。しかし、国立大学に改革が必要ないかという点、そうではありません。反省すべきところは反省し、研究と教育の実績を挙げることに全力を尽くしていかなければなりません。効率主義、成果主義に偏らないよう先生方を励ますのが、私の役割と考えています。

経営には素人ですが、外部の眼で見て意見を言うことは、経営に緊張感を与えるのに役立つと思つています。そのような役割を果たすよう力を尽くしたいと考えています。また、大学経営のあり方をよく考えるために、各大学の経営協議会が集まって意見を交換することがあつてもいいのではないのでしょうか。(談)

◆北尾哲郎 (きたお・てつろう)

1945年生まれ。1968年東京大学法学部1類(私法コース)卒業後、東洋エンジニアリング入社。1975年司法試験合格、1978年弁護士登録、1983年北尾哲郎法律事務所開設、1992年第一東京弁護士会副会長、1993年日弁連民事訴訟法改正問題研究委員会副委員長、1997年岡村綜合法律事務所パートナー、2001年第一東京弁護士会財務委員会委員長。現在、各種会社取締役・監査役。

大学が持つ 独自の価値に目を注ぐ

株式会社大塚家具代表取締役社長

大塚久美子氏

Kumiko Otsuka



「橋大学について感じることは、何よりもまず、価値のあるものをたくさん持っているということ」です。

例えば、今でこそ国立大学ですが、そもそも民間資金と民間の努力にそのルーツがあり、「商」を軽視する風潮が残っていた時代から、志の高い「商」を追求し、民間の経済活動の中において「公」と「私」のバランスを取りつつ社会に貢献する民のあり方を意識してきた歴史と、それに基づいた理念があります。また、多くの先輩方が築き上げてきた各分野での実績、遺産があります。こうした歴史や実績に裏打ちされた、他の国立大学とは一線を画す個性、誇るべき独自の価値は、もっと注目されても良いのではないかと思います。

研究や教育の面での成果が重要なことは言うまでもありませんが、それらに加えて、一橋大学の固有の価値という側面もあわせて意識することは、規模の小さな大学であっても埋没することなく、大学の財政的に支援する人の輪をひろげ、次の世代の優秀な学生を惹き付けるといっても意味があるのではないのでしょうか。受験生にも偏差値だけではなく大学が持つ志に共感して志望して欲しいですね。

そのためには、社会科学の総合大学である一橋大学としての独自の価値を、学外の多くの人々、とりわけ若い人たちにとつてもわかりやすく魅力的な形で、もっと積極的に発信しても良いと思います。

大学を取り巻く環境が厳しい中、微力ながら少しでもお役に立つことができれば、大変光榮です。(談)

◆大塚久美子 (おおつか・くみこ)

1991年一橋大学経済学部卒業。同年富士銀行(現みずほフィナンシャルグループ)入行、融資業務、国際広報などを担当。1994年株式会社大塚家具に入社、1996年取締役就任。経営企画室長、経理部長、商品本部長、広報部長などを歴任。2004年取締役を退任。2005年株式会社クオリア・コンサルティングを設立、代表取締役に就任。同年～2009年一橋大学広報戦略室にて、広報アドバイスをを行う。2009年3月より現職。

大学の社会的評価をあげる ルールづくり

新日本有限責任監査法人常務理事

二村隆章氏

Takaaki Nimura



大学では伝統的な監査を行っているが、それが、会計監査人との会合で感じたことです。上場企業の監査では、資産や負債をチェックする以前に「内部統制」に注目します。内部統制とは、組織が目指す目的を効果的かつ適正に達成するためのルールがあり、それが正しく運用されていることです。個人の判断ミスや不正から組織を守り、「社会的な評価を高めるためのルール」といえます。

例えば、JRのホームにいる人たちは、みんな切符を持っているとみなせます。それは、券売機や改札などがあるからです。この仕組みにより、JRにも顧客にも気持ちがいい状況が生じています。ルールが確立していれば、会社のお金と自分のお金の境

が明確になります。上場企業以外では、まだ内部統制監査が義務づけられていませんが、各人の善意の判断に委ねられているような状況を改善し、ルール化したほうが行動しやすいですし、信頼度が高まります。私が提案したのは、監査発見事項の順位づけ。これまでのように金融的観点からの順位づけではなく、内部統制的なものを優先したらどうかということ。優先順位の高いものから一つずつ潰していくことで、時間をかけて内部統制を強めていくという発想です。そのメリットは、意思決定のスピードにも表れてきます。一橋大学の社会的評価をあげるためのルールづくりを積極的に進めていきたいものです。(談)

◆二村隆章 (にむら・たかあき)

1972年一橋大学商学部卒業。1974年公認会計士第2次試験合格、アーンスト・アンド・ヤング会計事務所入所。同ニューヨーク事務所、同ロスアンゼルス事務所勤務。1997年新日本監査法人シニアパートナー昇格、米国SOX404アドバイザー業務担当責任者。2008年新日本有限責任監査法人常務理事就任(アドバイザーサービス統括部門副部門長)。各種企業にて会計監査およびSOX404アドバイザーを務める。経済産業省 産業構造審議会 知的財産政策部会経営・情報開示小委員会委員等を経て、現在、青山学院大学法学部大学院客員教授。

ガバナンスのチェックと 財務基盤の強化

フェニックス・キャピタル株式会社取締役

渡邊 彰氏

Akira Watanabe



国立大学法人となつて、一橋大学には学問の府としてレベルの高い教育、研究の場を提供する役割と同時に、独立した法人として健全な経営体制の確立と財務基盤の強化が求められています。ガバナンス面では、大学の運営に於いて経営協議会等を通じて外部の委員の眼が行き届いていることや、内部統制機能が有効に働いていることが重要と考えます。

財政基盤強化の観点からは、独立法人化に伴い大学への寄付など如水会をはじめとする外部からの支援がより重要になってきました。ところが、大学の会計は特殊なこともあって、一般にはわかりづらい面があります。外部からの支援を受けるためには、透明性の高いわかりやすい情報開示が必要となってきます。

アメリカの大学では、外部からの寄付を積極的に取り入れて手厚い基金を構築し、しっかりとした財政基盤を確立しています。それにより、レベルの高い教育、

研究の提供が可能になっていくわけです。その根本が、ディスクロージャーにあるといえます。

もちろん私ができることには限りがあるかと思いますが、民間企業での経営者としての経験を踏まえて、さまざまな提言を行っていきたくと思っています。また、アメリカ、イギリス、シンガポールに計14年と海外経験が長く、国際事情にも通じている点も強みかもしれません。

個人的には、ミシガン大学ロースクールへの留学、MITビジネススクールでの業務関連の講義等海外の大学生活の経験もあります。

こうした体験を生かして、母校である一橋大学の監事として少しでもお役に立てればと願っています。なお、私は如水会の常任理事・財務経理委員長を務めておりました関係から、如水会との一層の連携にも引き続き貢献できればと思っています。(談)

◆渡邊 彰 (わたなべ・あきら)

1948年生まれ。1971年一橋大学法学部卒業後、同年三菱銀行入行、1975年ミシガン大学ロースクール留学、1976年加州三菱銀行出向、1982年同国際金融部調査役、1994年同商品開発部長、三菱ファイナンスインターナショナル社長、1996年東京三菱インターナショナル社長、1998年東京三菱銀行シンガポール総支配人兼シンガポール支店長、1999年同取締役、2000年東京三菱証券常務取締役、2002年三菱証券常務執行役員エクイティ本部長、2003年日本リバイバル債権回収株式会社代表取締役社長(現任)、2005年フェニックス・キャピタル株式会社代表取締役CEO、2008年同取締役(現任)。

若手研究者との議論から新たな方向性を模索

法学研究科長



村岡啓一
Keiichi Muraoka

法 学部で学ぶ学生の中には、法科大学院を見据え、法律家を目指すというビジョンをもった人が多数います。それは素晴らしいことですが、学生には、もっと視野を広くもってもらいたいと思います。ピンポイントで自分の将来像を決めてしまうのではなく、何に発展するかわからないという部分があってもいいと思うのです。法律家になるにしても、さまざまな分野の多くのことを知っていないければ実践の場では役立ちません。社会を広くとらえるというアプローチこそ重要なのです。

と ところで、法学研究科の最大の課題は、大学院教育にあります。研究者養成という伝統的なコースを法科大学院経由としたことが、研究者志向者の減少につながっています。修士課程で充足率が6割程度、博士課程では3割を切っています。一橋大学は、法学部、法学研究科、法科大学院の制度設計の中で何を実現しようとしているのかを再度議論する時期にきていると思います。それによって、教員の配置も変わってきますし、目的に合わせてそれぞれの学生の定員も変わってきます。学生にとっては、法科大学院、法学研究科、国際・公共政策大学院と選択の幅が広がっていますが、一方では、法学研究科としてのアイデンティティが希薄になってきているのです。これからの時代を担う若手研究者たちと議論を重ねながら、法学研究科の新たな方向性を定めるのが私の役割だと考えています。(談)

研究科の原点に戻り確認、発展させていく

言語社会研究科長



糟谷啓介
Keisuke Kasuya

言 語社会研究科は新しい研究科ですが、干支でいえばすでに一回りしており、研究・教育とも安定してきています。その間、日本語教育の第2部門づくりや他大学との連携といった新しい試みを行っていています。先日、第2部門から初めての博士号取得者も現れました。次のステップは、海外との連携強化。昨年からは、中国、韓国、台湾の先生をお呼びして授業に参加するプロジェクトをスタートしています。それも、単発ではなくチームを組んで一緒に授業を行うといった、継続的な交流の試みです。大学院生も組み込んで、院生の研究力向上にも資するようにしているのです。また、一橋大学の教員も海外の

中 ・韓・台と物理的に近い国同士の交流を積極的に進めたいと思います。大学に行っても同様の取り組みをしようとも考えています。行い、ともかく人と会うことが重要です。足元を見ながら、時には歴史を遡ってこの地域を見ていかないと、短視眼で独善的なものになりがちです。一過性なものではなく、自然な形で交流を進めていきたいですね。言語社会研究科は、研究対象の幅が広く、全体のバランスをとるのが難しいですが、バラバラにならず、固まりすぎず、個々の院生や若手研究者が自由に活動できるような場を形成していきたいと思っています。つまり、これまでの方針を、原点に戻って確認しつつ発展させることで、新しい方向性を打ち出していこうとしているのです。(談)

日本とアジアを巡る二つの焦点

国際企業戦略研究科長



クリスティーナ・
アメージャン
Christina Ahmadian

国 際企業戦略研究科（ICS）では、次の二つに力を入れていきます。

一つは、「Japan in Asia」。ICSは、学生の6割以上がアジアからの留学生で、日本人学生も卒業後にアジアで活躍する人が多いことから、次世代のアジアのリーダーを育てたいと思っています。アジア各国はそれぞれ歴史や文化、政治形態が違います。ICSでは、こうした多様性に対応して活躍できる人材の育成に力を入れていきます。カリキュラムもアメリカのビジネススタイルとは一線を画しています。プロジェクトスタイルで講義運営をしています。中国、ミャンマー、フランス、日本など多様な背景の学生がチームを組み、1〜2年にわ

たつて、さまざまな観点から議論を重ねていきます。

ケーススタディでは、アジア企業やアジアに進出している日本企業、逆に日本に進出しているアジア企業などを、さらに拡充していきたいと思っています。

なお、日本人が思っている以上に、アジアでは日本の企業は尊敬されています。トヨタのサクセスストーリーを学び、日本の先端技術を知りたいと思っているのです。

も う一つの焦点は「今の日本のよいところ」。日本の最新のビジネスモデルやテクノロジーを紹介したいと思っています。例えば、ICSにはポーター賞があり、新しい日本の企業が受賞しています。また、日本の高齢化や環境問題への対応にも、アジア各国は非常に関心を持っています。それをもっと世界に発信していきたいですね。（談）

公共性の高いビジネスのチャンスを作り出せる人材の育成

国際・公共政策大学院長



高橋 滋
Shigeru Takahashi

国 際・公共政策大学院（IPP）では、ディベートやワークショップ、インターンシップなど、高度専門職業人を意識したカリキュラムを展開しています。ほかにも、アメリカでヒアリングをして政策提言をするという政策提言ツアーなども実施しています。現在このツアーは公募制ですが、ゆくゆくは正規のプログラムに発展させたいと思います。さらに、日米中の専門職大学院とカリキュラムの共同開発も計画中です。

最近では、市民、事業者、行政がともに担う「新しい公共」という概念が生まれていますし、企業の社会的使命が問われていますので、公務員や国際公務員ばかりでなくNPO法人や

シンクタンク、一般企業などにも活躍の場が広がっています。

院生の約4割が留学生であり、それも、政府派遣や国費留學生が高いウェイトを占めますから、世界のエリートと接することができます。こうした人的交流は、これからのビジネスシーンで大きな財産になるでしょう。沢山の教室で常に英語が飛び交っており、将来役立つ実践的な英語の訓練にはいい環境といえます。

I PPは実践力・応用力を備えた公共的な人材の育成、とりわけ公共性の高いビジネスのチャンスを生み出し創り出せる人材の育成を目指しています。院生には、勉強はもちろんですが、それ以上に国際的な人材とのコミュニケーションを身につけてもらいたいですね。（談）

学長が先頭に立って

国際化を推進する体制を構築

「戦略」を「推進」する時期が来た

一橋大学は第2期中期目標で、「世界で通用する多様な人材を育成するため、学部・大学院を通じて学生の国際交流を推進するなど、教育の国際化を進める」ことを打ち出しています。

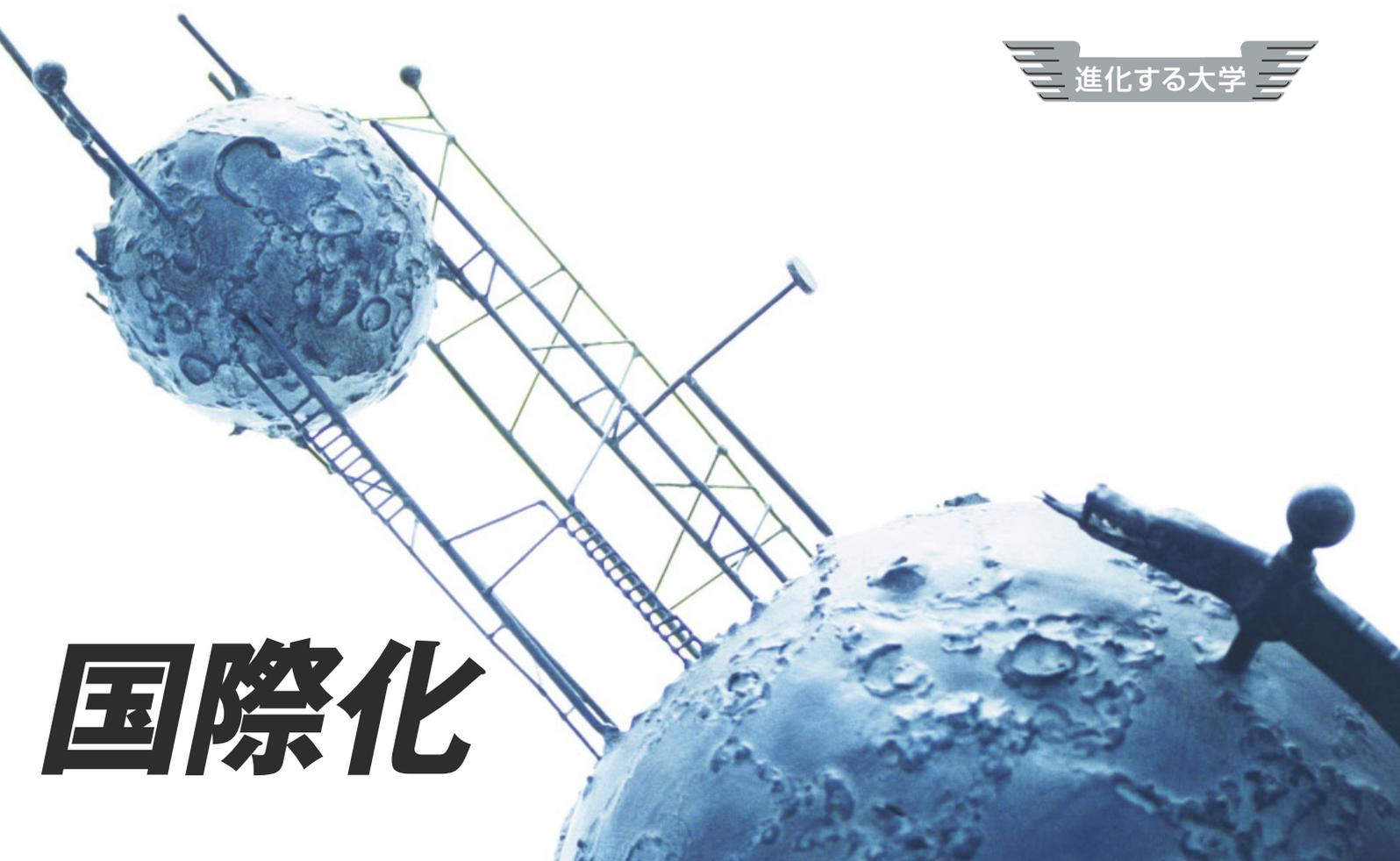
すでに第1期中期目標期間のうちに、学内には国際戦略本部が設立されており、戦略は練られてきていました。次の中期計画の6年間は、いよいよ、それを具体的に推進する時期です。そこで2010年4月に、国際戦略本部を、「国際化推進本部」（本部長は学長）へと改編し、学長のリーダーシップのもとに全学一丸となって一橋大学の国際化に加速度をつけていくことになったのです。学長自らトップになる本部事業は、一橋大学にとっては初めてのもの。まさに、国際化に本格的に取り組んでいく姿勢を内外に示したものだといえるでしょう。

日本人、外国人の別なく国際的な学生を育成

従来の国際交流の窓口は、留学生センターと留学生課でした。海外からの留学生や海外留学を希望する学生は、留学生センターと留学生課がフォローしていました。しかし、これからは単に留学という視点だけでなく、「国際的な学生」を育成するという視点で、発想を変えていかなければなりません。日本人、外国人を問わずに国際的な学生に育成する——そのためには、体制もそれに見合ったものに変えていかなければなりません。そこで、留学生センターを国際教育センターへ、留学生課を国際課へと改組したわけです。

進化する大学

国際化



また、国際化推進本部を下支えする国際化推進室は国際化担当の理事が室長、企画調査役の服部誠氏が総括ディレクターに就任し、国際教育センター、国際課との連携を深めています。

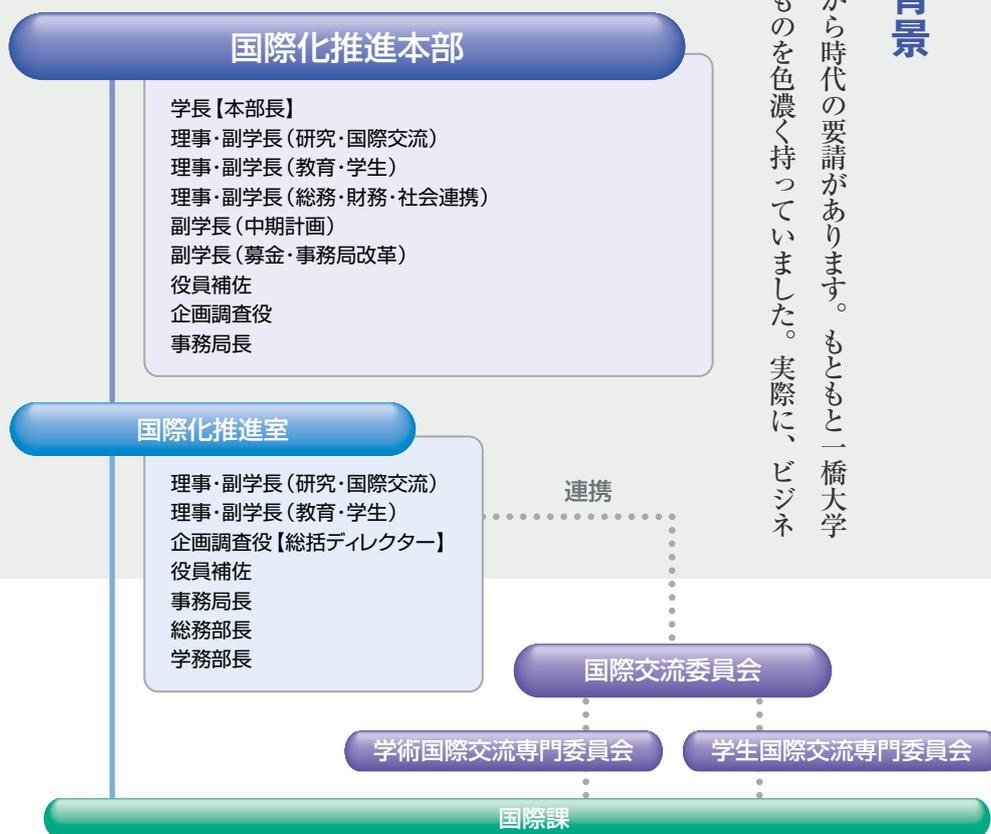
なお、これまで外国人留学生の日本語や日本文化の教育を担っていた留学生センターは、国際教育センターとして、より幅広い教育ができるようにしました。国際化推進のため、留学生の受け入れはもとより、海外の大学と留学生交流協定を結ぶ際には、送り出すこともこれまでに以上に重視しなければなりません。今回の組織改編により、国際教育センターの留学生受け入れ、送り出し、さらには相互交流を担う機能が強化されました。

一橋大学が国際化を急ぐ背景

国際化の推進を急ぐ背景には、当然ながら時代の要請があります。もともと一橋大学はその誕生の経緯からいっても国際的なものを色濃く持っていました。実際に、ビジネス界ではOBたちは世界の最前線で活躍しています。国際的というのは

一橋大学のDNAでもあったのです。しかし、最近では、留学に消極的な学生が増えてくるなど、グローバル化時代にふさわしい国際感覚が育まれていないのではないかとという危惧があります。さらに、大学自体もグローバル化に後れをとっているのではないかとという危機感がありました。そこで、そのDNAを思い出し、それを現代的なコンテンツへと継承し、よりレベルの高いものとして本格的な国際化を図っていこうというわけです。

〔国際化推進体制〕



第2期中期目標で、国際化の加速を打ち出した一橋大学。

国際戦略本部を国際化推進本部へと発展的に衣替えし、杉山学長自ら本部長として陣頭指揮をとることになった。

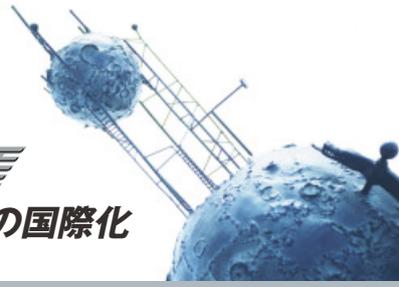
学内を見渡すと……

各研究科では、すでに国際的な活動の地歩を固めており、さまざまな国際交流を行っている。

教員個人個人のつながりから始まった国際交流が、自然に研究科という組織同士のものに発展。

いま、大学としての意思を持った国際的な交流へと進化を遂げ始めた。

加速する一橋大学の



留学生3000人受け入れ・送り出し体制を確立

基本的な構想は、まず学部レベルでの交換留学生の数を増やそうというもの。第2期中期目標期間終了までに、毎年新たに受け入れる留学生、送り出す学生をともに約3000名にしようというのが数値目標です。全学部で約4000名の学生のうち約3000名が常時海外に行つて勉強し、逆に一橋大学のキャンパスでは、毎年約300名の外国人留学生在が新たにやつて来る状態を目指します。さらに、学士課程国際プログラムを創設して、長期留學生の受け入れを可能にする計画です。

大学院レベルでは、留学により一橋大学と留学先大学の双方の学位を取得するダブル・ディグリー制度の検討が必要となります。これは、世界的に増えている仕組みですから、海外の大学との連携を強化することで、実現を目指しています。

もう一つのポイントは、学部の4年間で国際的なマインドを持った学生を養成することですが、そのためには、英語だけで授業を受けて学士が取れるようなプログラムも必要です。そこで、まず、国際的に優れた人材を育てる仕組みを学部の課程の中につくることができました。具体的には、共通科目、専門科目と並ぶ「国際交流科目」をつくって三本柱としました。「英語を学ぶ」ではなく、「英語で学ぶ」のが国際交流科目の主眼です。プログラムの中には、日本語教育など外国人留學生限定の科目もありますが、基本的には、外国人留學生、日本人学生を問わずすべての学生が履修できるようになっています。協定校からの交流学生にはもちろん、一橋大学海外派遣留學制度への応募を希望している学生や留學の準備段階にある学生にとって、大いに役立つ授業科目となることでしょう。教育科目として約30もの新しい科目群をつくったというのは、制度的には画期的なことです。

学生・若手研究者のマインドを国際化する

学部の授業を英語で受ける、4年間に1年程度は海外留學を経験する、毎年3000人程度の外国人留學生が新たにやつて来る……こうして学生のマインドを国際化し、学部時代にインターナショナルなコアをつくつていきたいと考えているのです。将来的には、大学院レベルでは、積極的にダブル・ディグリーに挑戦してもらいたいと思います。こ



事務体制の強化

〈国際課〉

受入れ・派遣
奨学金・宿舍
国際交流科目
学術国際交流

〔国際教育センター組織図〕



海外からの短期留学生

〔一橋大学グローバル・スタディ・プログラム〕

一橋大学グローバル・スタディ・プログラム

国際交流科目

〈日本語初級・英語で行う科目〉

〈英語等で行う科目〉

学部教育科目

〈日本語科目等〉

全学共通教育科目



日本人学生・正規留学生

国際交流科目

■ Japanese Language

Japanese 1(Basic)
Japanese 2
Japanese 3
Japanese 4
Japanese 5
Elective Japanese: Kanji
Elective Japanese: Writing (Introduction)
Elective Japanese: Reading (Introduction)
Elective Japanese: Grammar 1
Elective Japanese: Speaking (Introduction)

■ Japanese Affairs

History of Modern Japan
Contemporary Japanese Society
Media and Business
Reporting on Business and Finance
Comparative Higher Education
Intercultural Communication
Explore Japan Seminar

■ Business

Japanese Business Culture
International Financial Cooperation
International Comparison in Innovation 1
International Comparison in Innovation 2
Risk Management and Insurance in a Global Economy
Money, Banking, Financial Markets, and Monetary Policy
Business Ethics
Corporate Governance and Culture in Comparative Perspective
Japanese Corporate Management
Comparison of U.S. and Japanese Automobile Industries
Future of Japan's Electronics Industry
International Competitiveness of Japan's ICT Industry

■ Economics

Theory and Practice of Social Security Policy
Strength and Weakness of Japan's Financial System
International Economics
Economic Methods of Regional Analysis
Development Policy in Asian Perspective
China: Economic Powerhouse
Language and Economy

■ Sociology

Development and Social Change in the Global South

■ Information and Communication Technology

Fundamentals of Information Studies
Language and Virtual Reality

■ Academic Skills for International Studies

Social Science Seminar

■ Academic Skills in English

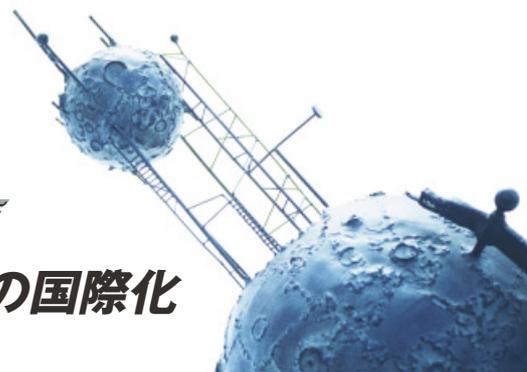
Academic Writing in English 1
Academic Writing in English 2
Presentation Skills in English 1
Presentation Skills in English 2
Academic English

■ Study Abroad

Euro-Asia Summer School

うして育ってきた優秀な学生によって、一橋大学のDNAを時代に合った形に再生し、社会的な存在感を高めていこうとしているわけです。

なお、日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に一橋大学の「社会科学重点大学連携強化に向けた若手研究者派遣事業」が採択されました。これは、その名称のとおりわが国の将来を担う広い国際的視野を持った研究者を養成するのが目的です。一橋大学では、学部学生から、アカデミックキャリアを目指す博士後期課程学生やポストドクターまでの若手研究者を対象として、最長12カ月の長期海外派遣を提案しています。対象は全研究科。この事業により、海外の社会科学重点大学との連携による教育・研究ネットワークの構築とともに、若手研究者に全学レベルの統一したサポートを行おうという構想です。これも、一橋大学の体系的な国際化推進戦略の重要な要素の一つとなっています。



25年にわたるタイの学生受け入れで蓄積したノウハウが国際化に弾みをつける

タイの学生が日本に憧れる理由^{わけ}

今年の4月16日〜20日、タイのチュラロンコン大学の修士課程の学生43名が、一橋大学を訪ねました。サービスマーケティングの学習が目的で、主要訪問先の一つが一橋大学だったのです。ほかには、日本企業やデパートの見学をしています。またテーマパークを見学し、そこでどんなサービスクが行われているかを観察しました。

このプログラムが実現できたのは、一橋大学大学院に留学経験のあるナタポール氏と商学研究科の山下裕子准教授との交流が根底にあります。ナタポール氏は、「韓国やドバイなども候補にして、どこに研修に行きたいかと学生に投票させたところ、日本に行きたいという希望が最も多かったのです。タイには日本企業も多いですし、日本のテクノロジーやゲーム産業にも強い関心があります。さらに、健康的なイメージがあるなど、日本にいい印象を持っている人が多いのです」と、研修対象を日本にした理由を語ってくれました。

ところで、ナタポール氏が教員になったのは、理由があります。「学部を卒業して一橋大学に留学したのですが、学部の学生が統計を使いこなしているのを見て自分の知識不足を思い知らされました。タイの修士課程でも学ばないことを学部で教えていたのです。タイの学生のためにも自分ももっと勉強し先生になって、高いレベルの内容と指導法を伝えたいと思ったので

す」。当初は修士修了で就職しようと考えていたナタポール氏でしたが、結局、博士課程まで進んで、チュラロンコン大学で教えるようになったのです。ちなみに、ものづくりの日本に対して、「タイでは外国からモノを買って、広報・宣伝で売る。マーケティングというより広報に力を入れているのです」。そんなお手柄の違いも、学問の傾向の違いにつながっているようです。

25年以上に及ぶタイとの交流協定

訪日したチュラロンコン大学生たちの年齢は、25〜30歳で、平日は働いており、金曜日と土曜日に大学院で学んで、キャリアアップを目指している人が多いといいます。彼らにとって日本で学ぶ意味は、単なる憧れというだけではありません。タイには日系企業が約8000社進出していて、生産ネットワークのハブとなっています。世界の優良企業が身近にあるわけですから、グローバル化が進んでいる日本企業がどんな活動をしているのか、自分のキャリアとからめて関心が強いです。

実は、一橋大学とタイ国との交流の歴史は長く、タマサート大学とは25年にもわたって協定を結んでいます。こうした交流から新たなプログラムが生まれ、近年では、タマサート大学のインターナショナルMBAの短期研修の受け入れを行っています。2009年には、タイの学生たちは一橋大学で講義を受けたほか、ソニー、



チュラロンコン大学
ナタポール氏



良品計画の各企業と、タイ大使館を訪問しました。今年も7月に同研修を実施します。

タイの学生受け入れでノウハウを蓄積

商学研究科の小川英治研究科長は、国際化の動きについて次のように語ります。

「今、一橋大学では、大学全体で国際化に取り組んでいます。タイの学生を受け入れて英語で授業を行うことは、教員にとっても良い経験になるでしょう。また、プログラムには、HMB A（経営学修士コース）の学生とタマサート大学の学生によるディスカッションや交流会などが組み込まれており、HMB Aの学生たちは、よりリアルな感覚でタイのマーケットが学べますし、多様な価値観に触れることもできます。ここで体験したことは、グローバル化したビジネスシーンでも役立つと思います」。

またHMB Aでは、外国人学生の受け入れだけでなく、HMB Aの学生を対象とした海外研修を実施しています。金融プログラムでは、2008年にはタイのバンコクへ、2009年は香港、上海へ学生を派遣する国際研修プロジェクトを行いました。ホスピタリティ・マネジメントプログラムでも、2009年に北京、上海にて国際研修を実施しています。

個から始まり組織対応に

なお、アジアばかりでなく、ヨーロッパと日本で行うユーロ・アジア・サマー・スクールも実施しています。これは、一橋大学とベルギー

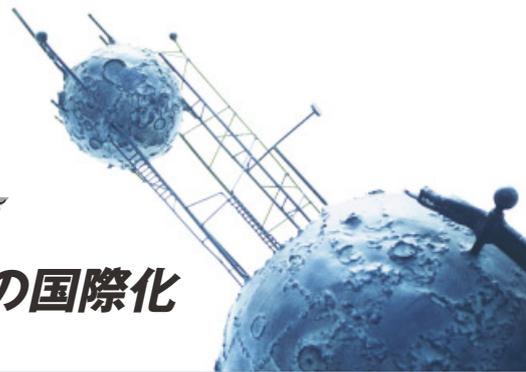


のルーベン大学で各1週間研修するというもの。ルーベン大学サイドの研修では、欧州委員会を訪問します。日本サイドでは、工場見学と秋葉原訪問を実施します。参加者は日本人学生、ルーベン大学生、韓国、スペインの大学生各10名の合計40名（予定）。一橋大学は日本のEU研究教育拠点であるEUSIの幹事校であることから、活動の中心的役割を果たしています。このプログラムでは、日本人学生は一橋大学のほか、慶應義塾大学、津田塾大学の学生が参加します。

「山下准教授とナタポール氏に始まったチュロンコン大学との交流のように、最初は個人から始まったものでも、ノウハウを蓄積することで、次第に研究科全体の活動へと発展していきます」と小川研究科長は語ります。これまでに、個別に進んでいた国際交流が、次第に研究科全体に、さらには大学全体へと広がっていくのです。

タマサート大学の学生たちは、一橋大学滞在中に日本文化について学び、商学研究科の講義を体験します。また、HMB Aの学生とのディスカッションを通して意見交換も行います。





世界の著名学者2名・若手研究者6名が示した 学園グローバル化の必然性

**国際的に卓越した研究者のもとで
若手研究者の育成を図る**

一橋大学経済研究所は、文部科学省から共同利用・共同研究拠点「日本および世界経済の高度実証分析」拠点に認定されています。政府統計ミクロデータの利用環境の整備をベースとして、国際的な共同研究拠点の形成を目指しているのです。平成21年度の補正予算では、「先端学術研究人材養成事業」が採択されました。これは、海外の著名研究者と若手研究者を招聘して、国際的に卓越した研究者の指導、監督のもとに若手研究者の育成を図るのが目的です。同時に、研究環境のさらなる国際化を図るのが狙いとなっています。

著名研究者としては、イェール大学の浜田宏一教授とペンシルバニア州立大学のクリシナ (Vijay Krishna) 教授を招聘しました。浜田先生は日本の「法と経済学会」を設立した方で、クリシナ先生はオークション理論の第一人者です。2人の先生による講義やワークショップは、在学生により刺激となりました。

若手研究者としては、丸山士行 (ニューサウスウェールズ大学)、Youngkwan Kwon (ヤンクワン・クウォン ソウル国立大学)、大野由香子 (シカゴ連邦準備銀行)、Eric Iversen (エリック・アイバーセン タスマニア大学)、Tina Shin-Tian Kao (ティーナ・シン・ティアン・カオ オーストラリア国立大学)、Olena Ivus (オレーナ・イーヴァス プリンセスエドワードアイランド大学) の各氏を招いています。

一橋大学で海外の若手研究者が学ぶ意味はどこにあるのでしょうか。青木玲子教授に簡単に解説してもらいました。

グローバル展開に耐える

いい研究環境づくりが不可欠——青木玲子

(経済研究所教授)

まず、若手研究者の顔ぶれを見ると、カナダからはウクライナ出身の研究者、オーストラリアからは台湾出身の研究者、シカゴから

若手研究者のコメント

若手研究者からも、コメントをちょうだいしました。



Olena Ivus
(オレーナ・イーヴァス) さん

「国際貿易と知的財産が専門。一橋大学の知材研究の先生方とのミーティングにより、これまで疑問に感じていたことが氷解しました。一橋大学に来なかったら、日本の直接投資に関心を持たなかったでしょう」



Tina Shin-Tian Kao
(ティーナ・シン-ティアン・カオ) さん

「専門は、産業組織論など。オークランドでも青木先生に指導してもらっていました。今も先生と一緒にプロジェクトを行っています」



は日本出身の研究者が来ています。研究者にとって国籍って何だろうと考えさせられます。優秀な研究者は、自分が自国で研究しなければならぬといった感覚はありません。研究環境のいいところがあれば、そこへ世界中から集まってくるのです。ですから、日本国内のある分野の研究者がいなかったとしても、いい研究環境を整えればいくらかでも優秀な研究者が集まってくるのです。

最近では研究が細分化する傾向がありますから、外部から来てもらわないと学問の進化についていけません。学問の世界もグローバル展開は不可欠になってきているのです。

そこで、研究所には国際的に魅力のあるどのような環境があるかということですが、例えば、計量経済学の最新技術を使ってマイクロデータを分析するとします。世界中の人が使いやすいアメリカのデータを使用して分析しています。ある意味ではアメリカのデータは使い尽くされたようなところがあります。長期的なデータの蓄積も大切ですが、新しいデータがつかねに必要になってきます。さらに、アメリカだけのデータでは、それがアメリカ特異のものか、普遍的なものかはわかりません。アメリカと並ぶ経済状況にある日本には信頼性の高いデータが揃っています。そのデータを分析することでアメリカの特徴や日本の特徴、普遍的なものが見えてくるわけです。信頼性の高い政府統計は使用できる場所が限られますが、一橋大学ではそれが可能です。

また海外では手法が確立されていても、日本ではまだ十分データを使って分析されていないものもあります。例えば、年金の金額が変化すると対象となる高齢者の行動が変わるばかりでなく、それを見ている若者の行動も変わってきます。海外では、年金制度の設計の際にこうした分析をやっていますが、日本でももっと詳しく分析する余地があるのではないのでしょうか。また、出生率の低下が社会的な問題になっていますが、何をどう変えれば出生率が変わるのか、そのすべての要因の調査がなされているわけではありません。まだまだ分析の余地があるのです。(談)



大野由香子さん
Yukako Ono

「企業の垂直統合に興味があったのですが、それが知的財産と接点があることがわかってきました。まだ具体化していませんが、データとどうアクセスしてどんな研究が可能か考えるいい機会ができました」



Youngkwan Kwon
(ヤンクワン・クウォン) さん

「経済学研究科岡室先生との共同研究で、技術協力が中小企業のイノベーションに与える影響を、日本と韓国を比較するところから始めています。できれば滞在を延ばして調査を継続したいと考えています」

情報開示を阻むのは、 文化？ 法律の不備？ 弁護士の抵抗？

情報開示が 日本で進まない理由^{わけ}

専門は民事訴訟法や倒産法です。現在最も興味深く、研究に取り組んでいるのが「情報開示」に関することです。行政では情報公開法の整備がされており、それに伴って民事訴訟の分野でも改正が行われてきました。企業対個人の訴訟が典型ですが、相手の手持ちの情報を手取る手だてがあまりなかったからです。これが日本の民事訴訟の問題で、アメリカではDiscoveryという開示請求が活発に行われています。日本でも、アメリカに倣って制度改正を行ってきて、それなりの成果を収め

てきたものではありませんが、現実にはうまくいっていないところもあります。

例えば、訴訟の準備のために訴えを提起する前に、開示請求ができるかどうかといった問題があります。訴訟を起こす前には勝つための証拠を集めなければなりません。本来なら、自主的に情報を開示して、真実に沿った判決を下してもらいたいはずですが、そのため、訴えを提起する前にも情報の開示請求ができるように法を改正いたしました。この制度はあまり使われていないようです。文化的背景があるのかもしれませんが、

日本の弁護士は自分の顧客のために大事な情報を隠すという傾向があるとも指摘されています。そこで、法に強制力を持たせようとすると、弁護士サイドなどからの抵抗が強くて作ることができません。「制裁が用意されていなくても、自分たちは積極的に情報開示をします」と弁護士は言いますが、いざとなると自分の顧客を勝たせなければならぬということもあるのか、なかなか開



示してくれないようです。真実に沿った裁判を目指して協力しなければならぬという弁護士としての使命感と、顧客に不利な情報は開示したくないというジレンマに立たされているのです。

トラック数台分もの 資料を開示するアメリカ

アメリカの場合は、訴訟を起こせばすべて開示します。それこそトラック数台分もの資料を出してくるので、かえって何が重要な情報なのかわからなくなってしまうくらいです。それが戦略かもしれません。情報開示が定着しているのです。

アメリカは訴訟社会といわれますが、すべてを裁判で決着しているわけではありません。どんどん訴訟をしますが、情報開示が行われますので、話し合いでまとめてしまうケースが多いのです。日本でもそれを目指して制度を作ったのですが、なかなか周知されていません。それでも、徐々に情報開示の方向にはなっています。例えば、最近の最高裁判所の判例では、金融機関が持っている顧客情報などが書かれた文書に

ついてもより積極的に開示を求める傾向が見られます。

日本で情報開示定着の歩みが遅いのは、文化的な面ばかりでなく法的な側面もあります。諸外国には、情報開示を当事者間だけのものとして一般公開しないですむ手段がいくつもあり、プライバシーを公開する必要はありません。日本の場合は、裁判になると原則としてすべてが開示されてしまいます。紛争解決のために裁判所と相手方だけに情報開示をしてもいいという考えはあっても、そういう仕組みになっていませんから、弁護士としては顧客を守る意識が強くなり、情報開示に伴う、真実に沿った判決が下せないのです。そこで、ジレンマを解消して法律の不備な部分を変えるべく、今なお検討が進められています。

ヨーロッパ型からアメリカ型への転換

民事訴訟法は、明治時代にヨーロッパの影響を受けて作られた経緯があります。戦後、GHQの影響でアメリカ的な要素も加わってきましたが、基本はヨーロッパ型です。ドイツでの民事訴訟ではアメリカほど広く情報開示を認める制度はありませんでした。ところ

が、日本では、1980年ごろから、情報の偏在化から消費者が企業に敗訴するケースが増えたこともあって、解釈によって情報開示請求ができるような法律にしてみました。しかし、それには限界がありました。そこで、アメリカ型がいいという方向になってきたわけです。

1990年代の終わりごろから、民事訴訟関連の法律の多くを改正しました。その際に法制審議会のメンバーとして学者や裁判官が参加しています。学者の意見がおった部分やおらなかった部分はありますが、こうしてある程度理想と現実のバランスを取ったわけです。

運用法に絡めて法曹のあるべき姿を考える

私はもともと、司法制度がどうあるべきか、どう運用していったらいいか

といった運用論などと絡めて考えることのほうに興味がありました。例えば、現状は弁護士が少ないからどうという問題が生じているとか、今後弁護士が増えていったらどう変わるか。あるいは、自己責任という方針のもと、弁護士を選択するほうがよいのかなどを考えるのが面白いと思っています。

日本では弁護士を付けなくとも訴訟ができる制度があつて、その際には裁判官がサポートしてくれていました。しかし、これには公平性に反してないかという問題があるのです。では、新司法試験により弁護士が増えたら、この制度はどうなるだろうか。弁護士を付けなければならなくなるのか、だとすると付けたくても付けられない人をどうするのか、といった問題があります。こうしたことを絡めて法曹制度のあり方を考えていくわけです。

弁護士が増えてくると、顧客は自己

責任で弁護士を選び、弁護士も競争社会になることで悪質な弁護士や力のない弁護士は淘汰されていくだろうという考え方がありました。1999年以來行われてきた司法制度改革は、こうした考えに強く影響されたともいえます。弁護士の選び方を間違えてしまっても自己責任で仕方がないという発想です。しかし、それは行きすぎではないかと思えます。

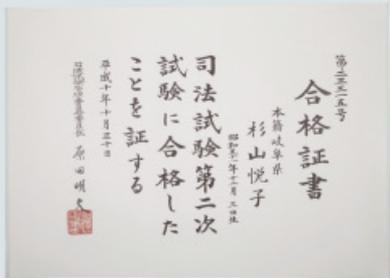
一般市民にはいい弁護士か悪い弁護士かを見分ける手だてはありません。弁護士の質の低下も指摘されています。また、最近の景気悪化の問題もあつてか企業内弁護士も増えていません。つまり、ロースクールを立ち上げたときの前提となつた理想論が崩れてしまったのです。法曹の姿の理想と現実をふまえて、民事訴訟制度をどのように変えていくか、考えていきたいと思えます。(談)

法学研究科准教授

杉山悦子 (すぎやま・えつこ)



1999年東京大学法学部卒業後、東京大学大学院法学政治学研究所助手。2002年一橋大学大学院法学研究科助手、2004年一橋大学大学院法学研究科専任講師。2007年イェール大学ロースクール卒業。専門分野「民事手続法」。



杉山准教授は、日米両国の司法試験に合格した後、研究者としての道を歩んでいる。



M&Aは企業に競争力をつける手段

2010年4月1日に第一生命保険が相互会社から株式会社へと組織変更し、株主100万人を超える日本最大の株主を擁する上場株式会社として誕生し、話題になりました。

私は、ゼミで会社法、金融商品取引法などを指導し、ICSの講座では、「M&A (Merger & Acquisition) 法務」を教えています。M&Aとは、「企業の合併と買収」という経営戦略のことです。私が、弁護士として担当した案件に、ブルドックスなどの買収防衛やみずほ三行統合、伊勢丹と三越の経営統合、三菱UFJ証券とモルガン・スタンレー証券の統合などがありますが、この第一生命の株式会社化にも関わっています。このケースも広義ではM&Aといえます。

M&Aは欧米ではごく普通の企業戦略としてとらえられており、日本でも2000年以降盛んに行われるようになってきました。企業の社会的役割は、成長し収益を

あげることで株主に利益を還元し、ステークホルダーにメリットを与えることにあります。それを実現するための手段の一つがM&Aです。

少子高齢化が進み市場が成熟している日本では、海外市場へ積極的展開を試みるという方法がある一方で、国内でM&A戦略を展開し、不採算部門の売却によるコストダウンや買収などにより企業価値を高め、競争力をつけていくという選択もあります。M&Aによるシナジー効果で、市場占有率の拡大や製品開発のスピードアップなどを図り、1+1を、3にも4にもしていこうという戦略です。こうして、現在では日本においてもM&Aはしかるべき経営戦略として、重要性が高まっています。

狭義のM&Aと広義のM&A

M&Aの形態はいくつかあります。合併(M)の代表的な吸収合併では一方の企業が吸収され解散し、他方の企業が存続会社となります。買収(A)によるものでは、株式買収、事業譲渡等があります。前者は対象会社の株式を少なくとも過半数保有することで経営権を掌握するという方法で、後者は事業部門を買収する方法です。ほかに会社分割による新設分割、吸収分割があります。新設分割とは、新会社を設立して事業の一部を継承させる方法で、吸収分割とは、既存の企業に事業の一部を引き継がせる方法です。

広義のM&Aには、資本提携や合併事業化などがあります。

M&Aは どこか結婚のプロセスに似ている

株式会社化がM&Aといえる理由

第一生命の場合をみると――。相互会社では、保険契約者が社員として総代を選んで経営しており、外部に株主のようなオーナーがいるわけではありません。株式会社化することで、株主がオーナーとして経営者を選ぶこととなります。つまり、経営権の変動が伴っている組織変更という意味では、広義の意味でM&Aといえるのです。

私は第一生命の法律顧問としてこのケースに携わりました。株式会社化の準備が始まったのは2年半以上も前のことです。同社は、少子高齢化で国内の保険市場は縮小していますから、資本調達しやすく経営の機動性の高い株式会社に移行することで、新たな成長戦略の可能性の幅を広げていこうと判断したわけです。当然、今後の海外展開の加速化や国内外でのM&Aも視野に入っています。

第一生命の組織変更に携わったスタッフは、社内だけで数百人、関連スタッフを入れると千人規模に及ぶと思われる。関連法も、保険業法、会社法、金融商品取引法、租税法など多岐にわたります。途中でリーマン・ショックが生じたため、スケジュール通りに全体を調整するのが大仕事でした。

いまやM&Aは企業人の必須知識

日本でもM&Aがごく普通の経営戦略となってきましたから、M&Aの実施ばかりでなく、敵対的買収などからの企業防衛も考えなくてはなりません。M&Aが影響を及ぼす範囲は、各社の経営企画や法務部門ばかりで

なく、経理、財務、人事など多くの部門に関わっています。したがって、どの部門の人材でもM&Aについて一定の知識を持つことが重要になります。

ちなみに、M&Aを私は冗談半分で結婚のプロセスにたとえます。つまり、紹介（お見合い）から始まり、調査（人柄や相性の確認）、基本合意（結納）、最終契約（入籍）、広報（披露宴）と続くからです。

私は、弁護士として、これまでに多くの経営統合案件や、買収防衛案件などに関わってきました。また、楽天とTBSのケースでは、中立的な第三者委員会のメンバーとして関わりました。さらに、18年にわたって大学で教えてきました。かつては実務家の教員は少なかったのですが、最近ではロースタールの設立もあり、弁護士教官が増えてきました。M&Aのようなケースでは実務家の経験が生きてくると思います。これからも、法律家の先輩として、後輩を指導していきたいと思っています。（談）

国際企業戦略研究科教授

岩倉正和（いわくら・まさかず）

1983年、司法試験合格。1985年東京大学法学部卒業。1987年最高裁判所司法研修所卒業後、西村総合法律事務所（現西村あさひ法律事務所）入所。1992年立教大学法学部講師。1993年ニューヨーク州司法試験合格、ニューヨークのディベボイス・アンド・プリンプトン法律事務所勤務。1994年ワシントンD.C.のアーノルド・アンド・ポーター法律事務所勤務。1996年西村総合法律事務所パートナー弁護士（現任）、横浜国立大学大学院国際経済法学研究科講師。1997年北海道大学大学院法学研究科講師。2004年一橋大学法科大学院講師（現任）。2005年京都大学大学院法学研究科講師。2006年一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授（現任）。2007年ハーバード・ロースクール（ハーバード大学法科大学院）客員教授。著書は、『企業法務判例ケーススタディ300 企業組織編』（監修・共著 金融財政事情研究会）、その他多数。





三商大

三商大ゼミ60周年、
三商大戦50周年を記念して、
新たな絆が生まれた

新制大学が継承する三商大の伝統

2010年2月1日、一橋大学は、旧三商大として伝統的に交流のある、神戸大学、大阪市立大学と、教育交流協定を締結しました。

今年は、旧三商大交流の象徴ともいえる

三商大ゼミ60周年、三商大戦50周年にあたります。

HQでは、その記念記事として、シリーズで三商大の交流活動を集めます。

第1回目は、三商大ゼミと三商大戦を中心に、

三大学の交流の歴史について振り返ってみたいと思います。

大学に昇格した 3つの高等商業学校

1920年～1929年、大正末期から昭和初頭にかけて大学令のもとに3つの高等商業学校が大学に昇格しました。それらは、東京高等商業学校から昇格した官立東京商科大学（1920年昇格、現一橋大学）、大阪高等商業学校から昇格した市立大阪商科大学（1928年昇格、現大阪市立大学）、神戸高等商業学校から昇格した神戸商業大学（1929年昇格、現神戸大学）であり、第二次世界大戦敗戦後の1949年に新教育制度が施行されるまで、日本の商学、経済学を牽引する希少な専門大学

として伝統を誇っていました。生まれも、育ちも類似していたこの3つの大学は、三商大と呼ばれ、昭和初期から1940年頃までは、積極的な交流活動を展開していたのです。特に、大阪商科大学の設立に当たっては、一橋大学OBでもある当時の関一市長の大きな貢献があったことは、記憶されるべきことです。昭和初期～敗戦以前発行の『二橋新聞』の中には、3大学の学長会議の記事掲載が多くあることから、同会議がほぼ恒例化されていたことが推測されます。また、大阪商科大学が大学昇格した年の『二橋新聞』は、「今年の進学年より大阪高商昇格と決定す」と見出しがあった記事を掲載しています（『二橋新聞』第65号 1928年1月



16日発行)。神戸商業大学に関しても昇格の前に、「神戸商大の特徴」（『二橋新聞』第81号 1928年11月5日発行）と題された、高垣寅次郎東京商科大学教授の寄稿文が掲載されています。さらに、1942年4月10日発行の『二橋新聞』では、三商大共同で商業教育刷新案を政府に提出するなどの記述があります。こうした記事を見るだけでも、それぞれの大学に対する関心、交流の深さをうかがうことができます。

名前や中身が変わっても 継承される、 三商大の伝統

1940年以前に発行された『二橋新聞』の内容と1945年以降発行のものを見比べると、三商大に対する扱いが著しく変化していることがわかります。1940年以前、つまり第二次世界大戦以前の『二橋新聞』の紙面は、三商大関連の話題に多くのスペースが割かれています。そこには、どこか目的を共有する同胞意識のような雰囲気を感じ

ることができず。ところが、1945年以降（終戦後数年間は、『一橋新聞』の発行はありません）発行の記事からは、三商大関連の話題は極端に減り、代わって学内情勢や社会情勢に関する記事が増えていきます。この時期、日本は敗戦を経験し、大変革を余儀なくされます。とりわけ1949年は、教育界にとって歴史的に大きな意味を持つ年となりました。新しい学校教育法の制定により旧制度は全撤廃され、学制が抜本的に変更されたのです。この

年を境に三商大は、それまでのかたちを失い、学問の伝統を継承しつつもそれぞれが一橋大学、神戸大学、大阪府立大学と名を変え、組織や性質も大きく変わっていきます。こうした教育界の状況変化が、三商大間に距離を作った要因の一つともいえそうです。しかしながら、このような変化の中にあつて、三商大を冠した2つの活動「三商大ゼミ」（1951年）、「三商大戦」（1961年）が、学生の手により復活することになります。大学名の変更は、大学のアイデンティティに大きな影響を与えます。大学が長年にわたり培ってきた存在意義や個性といったものが、外からは見えにくくなるからです。その意味でも「三商大ゼミ」、「三商大戦」の活動は、単なる交流活動ではなく、三商大をはじめ多くの旧制大学の伝統

と存在を後世に伝えるという重要な役割を担っているのではないのでしょうか。

60周年、50周年のあゆみを探る

「三商大ゼミ」と「三商大戦」は、先にも述べたとおり学生が企画し、運営していたため、一橋大学では事務的関与がなく、活動記録もほとんどありません。当事者である学生団体も、「三商大戦」（正式名称「三大学体育大会」）は、体育会総務が窓口となり大会を統括していたことに留まり、ここにも過去のあゆみを知るための資料は存在しません。ちなみに今年度の大会は、開催担当校の大阪府立大学が運営し、6月25日に開会式が行われました。開会後は運動部ごとにスケジュールを調整し、約半年をかけて対抗戦が行われることとなります。

一方「三商大ゼミ」は、2010年度6月現在、運営団体による大学への登録はありません。想像の域を越えませんが「三商大ゼミ」は「三商大戦」と比べると実施期間が短いことに加え、そもそもゼミ間の交流であるため、特定団体は組織されず、その都度参加ゼミの学生が運営しているのかもしれない。しかし、記録については、一橋大学生が編集する学術情報誌『ヘルメ

ス』（第7号1955年発行と第8号1956年発行）の中に、手がかりとなる記事を発見することができました。そこには「三大学合同研究発表会」という名称のもとに開催報告記事および一橋大学生による発表論文の一部が掲載されています。第8号にある報告記事の書ききでは、その年の開催が一橋

大学であること、「三大学」が一橋大学、神戸大学、大阪府立大学により構成されていること、発表会の初回は、1951年であること、初回開催は大阪府立大学であり、以降は当番制で開催されるのが記録されています。また、同前書きによると、第1回目から第4回目までは、発表会の正式名称は、「三商大発表大会」であり、第5回目から「三大学合同研究発表会」に変更されたと記載されています。ここで確認を必要とするのは、『ヘルメス』に記載されている2つの発表会が、つまり「通称三商大ゼミ」と同じものであるかです。それを証明するのが、1958年6月30日発行の『一橋新聞』です。第1面に「三商大ゼミ」の記事掲載があり、そのリード部分には、「第8回三商大ゼミナール（研究発表会）」とあります。これで、『ヘルメス』第8号に掲載されている「三大学合同研究発表会」と「三商大ゼミ」が同一のものであることがわかりました。なお、現在の「三商

大ゼミ」の正式名称は「三大学学生討論会」ですが、1960年時点で、一橋大学新聞部による廃止論とともに、現在の名称が使われています（『一橋新聞』1960年5月30日発行）。

三商大発足直後からスタートした対抗戦

「三商大ゼミ」については、ある程度60周年の源流を探り当てることができました。しかし、「三商大戦」の50年については、運動部の全体を軸として捉えた時と各運動部を軸として捉えた時とは、解釈が分かれるところです。昭和初期に発行された『一橋新聞』の記録によると、運動部による対抗戦の歴史は長く、神戸高等商業学校が神戸商業大学に昇格した1929年直後から、野球部によるリーグ戦が始まっています。おそらく対抗戦の歴史ということであれば、3校のつながりは高等商業学校時代から続いていることと想像しますが、ここでは大学昇格以降の交流に焦点を当てたいと思います。引き続き『一橋新聞』の記事に戻りますが、昭和初期の一橋大学では、三商大戦リーグの具現化に向けていくつかの運動部が積極的に活動しています。1931年の段階では陸上競技部、弓道部、水泳部、柔道部が対抗戦リーグを



新制大学が継承する
三商大の伝統

●初の三商大総合大会の開催種目
（『一橋新聞』1942年8月10日発行より）

種目
馬術
ラグビー
剣道
柔道
弓道
野球
硬式庭球
軟式庭球
ホッケー
蹴球（サッカー）
排球（バレーボール）
籠球（バスケットボール）
陸上競技
水上競技
卓球
射撃

設立し、年を追うごとに他の運動部の参加が増えていきます（『一橋新聞』1931年6月6日発行）。また、1942年には、初の三商大総合大会開催という記事があります。しかし総合大会としては初回開催であっても、既に多くの運動部が独自に対抗リーグを持つ

旧三商大の今



一橋大学

学部	大学院	研究所
商学部 経済学部 法学部 社会学部	商学研究科 経済学研究科 法学研究科 社会学研究科 言語社会研究科 国際企業戦略研究科 法科大学院 国際・公共政策大学院	経済研究所



神戸大学

学部	大学院	研究所
文学部 国際文化学部 発達科学部 法学部 経済学部 経営学部 理学部 医学部 工学部 農学部 海事科学部	人文学研究科 国際文化学研究科 人間発達環境学研究科 法学研究科（法科大学院） 経済学研究科 経営学研究科（専門職大学院） 理学研究科 医学研究科 保健学研究科 工学研究科 システム情報学研究科 農学研究科 海事科学研究科 国際協力研究科	経済経営研究所



大阪市立大学

学部	大学院
商学部 経済学部 法学部 文学部 理学部 工学部 医学部医学科 医学部看護学科 生活科学部	経営学研究科 経済学研究科 法学研究科 文学研究科 理学研究科 工学研究科 医学研究科 看護学研究科 生活科学研究科 創造都市研究科 法科大学院

ていたことから、対抗戦の開催回数運動部ごとに異なって記録されています（『一橋新聞』1942年8月10日発行）。「三商大戦」には、50年には到底収まりきれない、伝統の重みがあるようです。
先輩たちによって積み上げられてき

た「伝統」を守る今の学生がいる一方で、移動手段やコミュニケーション手段に限りがある時代に、関東と関西を行き交いながら「伝統」を育ててきた商大生たちがいます。「伝統」という言葉には、理屈を超えて人を動かす力があるようです。

《お断り》
「三商大ゼミ」、「三商大戦」については、引き続き資料を収集しています。本号記事への訂正、補足を含め、詳しい情報などおわかりでしたら、HQ編集部までお寄せください。

Captains

連載企画

一橋大学創世記。

そこには、新しい価値を創らんとする力があつた。建設者としての誇りと意志があつた。

「Captains」それは近代日本の発展に多大なる功績を残した人々のストーリーである。

学問、国、家業、大学運営……有事のたびに求められた人格。

「Captains」第5回では、関 一の足跡を追ってみた。

第5回



石河光哉／作 一橋大学附属図書館所蔵

関
一

2008年10月25日、一橋大学「関西アカデミア」の会場に、日比野実枝子さんがいらっしゃいました。

関一（せき・はじめ）の写真を一橋大学に託すためです。

それをお預かりしたのが、一橋大学広報誌『HQ』で、

この「Captains」の企画当初からコーディネーターも務めている経済学研究科の大月康弘教授でした。

後日、日比野さんからいただいた資料が大月教授より編集部に提示されたことで、

今回の特集が組まれることとなったのです。

「知るも知らぬも大阪の関」として、大阪では絶大な人気を誇り、

東京市長の後藤新平と並び称される名物市長の関一。

資料を読めば読むほど、これほど「Captains」にふさわしい人物はいないことが浮かび上がってきました。

Captains 関一

大阪市民に愛された

学者市長 関一

理論と実践の融合で

近代大阪の骨格をつくる

大阪の黄金時代を築いた名市長を

母校の人に知ってもらいたい

関一と日比野実枝子さんとは、どんな関係があったのでしょうか。実は、これらの資料を集めていたのは、日比野さんの母上である春水さんでした。春水さんの父親である魚津要太郎氏は、東京高等商業学校（現一橋大学）本科を1911年に、専攻部を1913年に卒業されました。一方、関は1903年に初代端艇部長に就任以来、一橋大学のボート道の確立、隆盛に情熱を注いでおりま

した。魚津氏は端艇部でエイト（8人漕ぎの種目）の選手として活躍していたこともあって、関からなにかと目をかけてもらったといえます。1923年に関が第七代大阪市長に就任した際には、助役に就任してほしいと依頼されたほど、信頼されていたのです。ちなみに、魚津氏は「お役所勤めは不向きだ」と実業家の道を歩んでいます。

魚津氏のお嬢さんである春水さんが関の資料を収集し保管していたことから、実枝子さんも自然に関に関心を持ち、関に関する記事や書籍を読むようになったといえます。

「現在の大阪は、『真冬の時代』です。ですが、

かつて大阪には、高等商業学校（現一橋大学）ご出身の先生が、大阪の近代都市への飛躍に卓越された指導力を発揮されました、有名な蟬丸の『逢坂の関』のもじりで、これやこの都市計画の権威者は『知るも知らぬも大阪の関』と称えられました名市長がおられましたことを、関一先生の母校の皆様にも、一般の皆様にも知って頂きたいとかねてより願っておりました」（日比野実枝子さんからのメッセージ）

実際に、関一が助役、ついで市長だった二十余年間は、まばゆいばかりの活力に溢れており、「大阪の黄金時代」と呼ばれていました。

矢野二郎校長排斥運動に参加して 放校処分を受ける

関は1873年に静岡県で旧幕臣の子として生まれました。やがて東京に戻り、高等商業学校（1902年に東京高等商業学校に改称）本科に入学。父親の病死で苦学を強いられながらも優秀な成績で卒業しました。その間に、矢野二郎校長排斥運動に参加して、放校処分を受けています。関の放校処分を心配した叔父の高山弦八郎は、矢野校長宅の門前に何日も座り込んで面会してもらい、涙ながらに訴えたのです。この涙の懇願によって復学を許された関は、卒業生総代を務めて卒業したのです。

母校に迎えられたのは1897年、24歳のときです。その1年後に、ベルギー、ドイツに留学しました。一橋大学にとって一つのエポックである「ベルリン宣言」*の立役者の一人でもあります。

Captains 関一

政策は実行だという思いと 大阪市政に携わるまでの逡巡

その関が、なぜ大阪市長になったのでしょうか。1914年に第一次世界大戦が勃発し、日本はその特需により急速な経済成長を遂げました。同時に都市の肥大化が進み、大阪でも土地不足や道路、交通機関、電気、水道などのインフラの不備が問題になってきました。時の市長である池上四郎は、「それを解決するには都市政策の専門家を招聘すればいい」と考えたのです。相談を受けたのは、京都帝国大学（現京都大学）の戸田海市で、彼は、当時、東京高等商業学校で教鞭をとっていた関を推薦しました。そこで、元高等商業学校校長だった三十四銀行（現三菱東京UFJ銀行）頭取の小山健三が、その仲介を頼まれたのです。彼は高等商業学校時代に校長として福田徳三、佐野善作、関一など優秀な若手研究者を積極的に採用しています。1914年1月15日、関のもとに小山から手紙が届きます。日記には、「去十三日付ニテ小山氏ヨリ大阪市助役ヲ引受ケテハ如何トノ書面至ル」とあります。関の周りでは、反対論が渦巻いていました。「一橋大学百年史」には、「学生の間から留任をのぞむ声が起こり、直ちに委員をあげて活発な留任運動が展開された」「教授会でも関教授の辞任には反対の意向であり、同窓会常議会も一致して反対を決定した」と書かれています。また、関自身が整理していた留任要望書のなかに、在阪OBからのこんな文章があります。

「当方高級助役ハ社会上ノ位置ニ於テ、高等商業学校教授ニ及バザルコト遠シ、高級助役トシテ貴君ガ懐抱セル理想ヲ実行セントスル如キハ不可能ナリ」「母校及同窓会ノ名ヲ辱ムルモノトス」

当の関はどう考えていたのでしょうか。関の日記には、「予ノ国家ニ貢献スルノ途ハ必ズシモ一橋ノ小天地ニ限ラルルモノナランヤ 自治制又ハ実業界ノ天地ニ自家ノ抱負ノ一端ヲ実行セントスルモ亦国家ニ尽ス所以ト云ウベキナリ」とあります。また、「自分の学問は政策の学問である。政策は畢竟実行だ。研究したことを自分で実行してみたい。また実行しつつ研究を進めてみたいのだ」と語り、意欲を示しています。大阪市助役への転身は、ある意味では積極的なものであったと考えられます。実際に、助役、市長になってからも、多くの論文を発表しています。

しかし、小山から打診された同月には「助役ノ地位モ余リ望マシキ所ニアラズ 過去大阪市ノ状況ニ照ラスモ多少ノ抱負ヲ実行シウベキヤ疑ナキ能ハズ」と、手紙をくれた小山に返事を書いています。そう簡単に決断できず、悩んでいた様子がよくわかります。小山の勧めで池上市長に会った際に、学者が助役になる意義を説かれて、「略応諾ノ意ヲ漏シタリ」と助役就任の決意をしました。

御堂筋、地下鉄敷設、 大阪城天守閣再建： 近代大阪の骨格をつくりあげる

「市民のための住み心地よき都市の建設」というのが、関が一貫して強調していた行政目標で

* ヨーロッパ留学中の高等商業学校教員8名によって1901（明治34）年1月末に起草された「商科大学設立ノ必要」。欧米では大学レベルの商業教育機関を求める動きがあり、日本でも商科大学の設立は「刻下の急務」とした。



御堂筋
写真：産経新聞社

す。1918年11月に第一次世界大戦の休戦条約が結ばれると、これまでの好況から一転して不況に陥ってしまいました。そんななかで関は、自らを委員長とする都市改良計画大阪調査会を立ち上げます。

大阪といえば御堂筋を思い浮かべる人が多いと思いますが、これはその第一次都市計画事業

によりできあがったものです。当時は道幅6×8メートルの貧弱なものでした。そこに幅員24間(43・6メートル)という常識外れの道路を通そうという計画です。「飛行場でもつくるつもりか」という嘲笑や、財政問題など湧き上がる反対論を、関は「大大阪ノ中心街路タルニ恥ジザル幅員ト体裁」をと、徹底的に押さえ込みます。

御堂筋により大阪の中心をつくろうという構想があったからです。これにより、大阪を南北に貫く風格のある幹線道路が

できました。

1923年11月に市長に就任。大阪市の市域を拡張する「大大阪」計画がスタートしました。それは、都市部の環境を整備して「市民のために住み心地よき都市の建設」を行うためです。その足となるのが、地下鉄でした。地盤の悪い大阪であるのに加えて昭和恐慌による財政難もあって苦難続きでしたが、1933年5月にわが国初の市営高速鉄道が梅田―心斎橋間で開通しました。

1928年には大阪商科大学(現大阪市立大



大阪城 写真：産経新聞社

学)が設置されました。これは大阪市立高等商業学校が大学に昇格したものです。そこには、国立大学のコピーではなく、「大阪市を背景とした学問の創造がなくてはならない」という、明確な理念がありました。それは、当時世界でも珍しい日本唯一の「市政科」を設置したことからもよくわかります。

市民を巻き込んで、大阪のシンボルである大阪城天守閣の再建も行っています。「市の呼びかけに、太閤はんのためやったらと全市民が乏しいふところを探り、巾着を裏返して浄財をはたいたのである。誰がアホな軍国主義鼓吹のためになんか金出さない、ということろだ」

1928年に再建された大阪城天守閣の総経費150万円は、市民の寄附によって全額が賄われたのです(当時は小学校教員の初任給が4円から50円という時代でした)。同時に関は、住友家から茶臼山の寄附を受けて天王寺公園の大整備も行いました。

270万市民が父と敬った

関市長逝く

1935年1月14日、関は病床につきました。室戸台風の復旧作業の陣頭指揮などで休む間もなく活躍し疲労が溜まったのでしよう。正式な診断の結果は、腸チフス。関市長重体の報が流れると、一般市民から輸血の申し出が相次ぎました。しかし、26日に親族、友人、市関係者らが見守るなかで、関は息を引き取りました。最後を看取った主治医の熊谷謙三郎は、「故市長様

の謔言(うわごと)は25日の夕方頃より始まり26日は意識不明の間は殆んど謔言のみでありましたが、其謔言は全部役所関係予算関係のことに限られていました」と語っています。室戸台風被害の復旧予算のことが、病床にあっても頭から離れなかったのでしょうか。

大阪市は、関の功績に市葬をもって応えました。葬儀を実況中継したラジオでは、「270万市民が父と敬い師と仰いだ我等の市長関さんは、今や接する由もなき、呼べど答えぬ、遠いあの世へ逝かれたのであります」と報じています。そして、市長の死を悲しんだ市民8万人が市葬に参列したと記録されています。それだけ市民に愛されていたのです。

一(はじめ)物語にみる

関一のCaptainship

関一は、その名のとおり「一(はじめ)」の体現者であり、パイオニアでもあります。

例えば、苦学をしながらも総代(二番)で高等商業学校を卒業したことからはじまり、「シティ・プランニング」を「都市計画」と初めて翻訳したといわれています。また、大阪市立大学の前身である大阪商科大学は、全国で初の自治体大学で、日本で唯一の市政科が設置されていました。さらに、大阪の地下鉄は、わが国初の市営高速鉄道です。「市民のための住み心地よき都市の建設」を目指していた関らしいのは、日本で最初に大気汚染の定点観測を行ったことです。なによりも「住み心地よき都市」という概念自



1934年(昭和9年)7月、貴族院議員選出祝賀会で撮影された写真。前列中央が関一。関一の右隣から母よし氏、四女和代氏。関一左隣は、三男義雄氏。後方右端は日比野さん祖父、魚津要太郎氏。
写真提供:日比野実枝子氏

体が、驚くほど先進的なものといえます。時代をリードするまさに「Captains」の一人だったといえます。

さらに一（はじめ）関連で紹介すれば、市長としての年俸は総理大臣をはるかに超え、官公庁関連では日本一の高給取りだったとされています。ところが、これほどの高給を得ていた関が遺した財産は、わずか一万円足らずだったというのです。麦飯による一汁二菜と質素な生活をしてきた関だけに、大阪市のために私財を投じたものと思われまます。その清貧さに市民は改めて驚いたといえます。

今なお愛され続ける関一 語り継がれる偉業

今なお関は大阪市民に愛されています。1956年には、大阪市立東洋陶磁美術館前に偉業を顕彰するために故大阪市長関一博士遺徳顕彰会が銅像を建立しています。その碑文の一部を紹介します（句読点加筆）。

「大正から昭和の初めにかけての大阪は、第一次大戦を機縁として急速な発展をたどり、近代都市としての態勢を整うるに絶好の機会を迎えました。この時にあたって博士のような明達の人を得て、躍進する市勢に向かうべきところを示すことができしたのは、市民にとつてまことに仕合せであったと言わねばなりません。

博士の業績は枚挙にいとまありません。市域の拡張を断行し、都市計画を樹立して、近代都市大阪の基礎をつくりました。市民病院、市民

館など社会事業の創設拡充につとめました。美術館の建設に着手し、大阪城天守閣を再建して、文化都市の面目を整えました。学区を廃止して義務教育の機会均等をはかり、商科大学を開設して市立大学制度の基礎を築きました。また、中央卸売市場を設け、築港計画を拡張し、市営バスを創めるなど、およそ今日の大大阪に見る市営事業の根幹は、おおむね博士の経緯に出ずるものであります。御堂筋を飾るいちよう並木の美しさも、その下を通る地下鉄の便利とを考えてみるだけでも、博士の高邁なる識見と果敢な実行の賜物。今なお生けるが如く市民の眼前に浮びあがってまいります。

わが大阪が今日の大をなし得たのは、長い歴史に培われた自由の精神と古い伝統に養われた実践力行の美風によるものでありますが、また市民とこれを代表する市会の博士に対する信頼が市政の運営に不動の基盤を築いたことを忘れてはなりません。

大阪市民がその最も必要とする時期において学徳ともに優れた関市長を得たことは、われわれの喜びとして永久に銘記すべきであろうと思えます」

【出所】

『関一日記 大正・昭和初期の大阪市政』

（関一研究会／編 東京大学出版会／刊 1986年発行）

「大阪100年の源流・いまなぜ『関一』か」

（加来耕三／著 「産経新聞」

1989年9月15日～1990年3月30日）

※本文中、取材協力者以外は敬称略。

※引用中の旧仮名づかい、旧漢字は、現代表記へと改めました。

Captains 関一

【関一 略年譜】

- 1873年（明治6年） 旧幕臣の小学校教員の家に生まれる。
- 1893年（明治26年） 高等商業学校（現一橋大学）本科卒業。
大蔵省勤務、神戸商業学校（現兵庫県立神戸商業高等学校）教諭。
- 1896年（明治29年） 新潟市立商業学校（現新潟県立新潟商業高等学校）校長。
- 1897年（明治30年） 母校高等商業学校（1902年に「東京高等商業学校」と改称）教授となり、社会政策論及びその延長として都市計画論を専門とした。
- 1910年（明治43年） 法学博士。
- 1914年（大正3年） 池上四郎市長の補佐として大阪市助役に招かれる。
- 1923年（大正12年） 第7代大阪市長となる。
- 1934年（昭和9年） 7月3日貴族院議員。
- 1935年（昭和10年） 1月26日永眠。



各界でユニークでエネルギーギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち。その活躍分野は多岐にわたっています。彼女たちがいかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？ 第26回は、大和証券グループ本社CSR室長の河口真理子さんです。聞き手は、商学研究科准教授の山下裕子です。

CSRは両生類

外部不経済って何それ

山下 河口さんはCSRの専門家として活躍ですが、学生時代からそういった方向を目指していらしたのですか？

河口 道程をお話すると長くなります（笑）。大学3年のとき、環境問題に関心を持ったことが、そもそもの契機。経済学の授業で外部不経済について学び、「何それ。じゃあ公害はどうなるの」と思ったのです。外部不経済は大雑把にいうと、マーケットプライスのなかに組み入れられないものは、ないことにしようっていうことです。でも、公害はないことにしているうちに積み重なり、悪影響が広がってしまいます。見えるところだけ見る市場理論ではなくて、不経済な部分もひっく

るめて説明できるようなマーケットの見方は何か、それが、原点だったように思います。

山下 よくわかります。女性は、現実主義で、嘘やごまかしが嫌いですよね。男性は、論理的に美しい世界が好きですが（笑）。

河口 学生時代は、経済学が関心を示さない外部不経済がそのうち逆襲してくるのではないかと思っていました。大学院では排出権取引に関することなどを勉強しましたが、経済学の範疇としては捉えられていませんでした。もっと思いきり勉強したいなという思いがあったので留学を考えていたのですが、直前に父が事故に遭い就職することにしたんです。大和証券に入社したのは、マーケットを学ぶなら理論しかない大学より本物の市場に近い証券会社がいいのではと思ったからでした。とはいえ、当時は修士の女性をとる企業が皆無に近かったというのが大きな理由でした。



大和証券グループ本社
CSR室長

河口真理子氏



Mariko Kawaguchi

商学研究科准教授

山下裕子



Yuko Yamashita

山下 大和証券ではどんな仕事をなさっていたのですか？

河口 最初は支店向けの外国株の営業でした。私が入社した1986年当時は「いけいけどんだん」の時代、夜の9時10時までの残業は当たり前。コンプライアンスも怪しければビジネスは完全に男社会で、私が外線電話に出ると「誰か男性はいないの」(笑)。

やりたいテーマが仕事になっていく

山下 そのなかでも、環境に関わりつづけていらしたとか。

河口 アフター5でNGOに参加し、リオサミットのサポートなどをしていました。91年に日本株のアナリスト部門に異動し、93年の組織変更で大和総研の翻訳チームに入りました。上司が理解のある人で、空いている時間に環境問題について勉強することを許してく



れました。97年に環境経営について社内論文集に書いたのがきっかけで注目を浴びるようになり、自分の仕事としてじょじょにCSRの評価制度づくりに関わるようになりました。エコファンドやコンプライアンスなどが社会的な関心を集める

ようになったのもこの直後からでした。この時期に育児休暇で10カ月程仕事を離れましたが、復帰後はCSRやSRI(社会的責任投資)の調査研究を中心に仕事をしています。

山下 軌跡を伺うと一本筋が通っているように見えます。ご自身のなかでやりたいことをしっかりと持ちつづけられたからなんでしょうね。

河口 20代の頃は辛くて、何度も辞めようと思いましたが(笑)。いま振り返ると、仕事として強制されなければ身につかなかった知識があとから生きてきた。また仕事を通して次々にやりたいテーマが出てきたから歩んでこられた。いまは自分に与えられたミッションだという思いで取り組んでいます。

成長神話からの脱却を真剣に考える時代

山下 女性の働き方にしても、環境問題にしても、この20年間で社会の規範はガラリと変

わりました。でも何もなかったところからいきなり変わったわけではなく、世の中の底流にあったものが、目に見える流れになったということだと思います。底流を掴み大きな流れを作り出したのは河口さんのような先駆者のお力ですね。

河口 いま私たちは、成長神話からの脱却を考えるべき大きなパラダイムシフトを迎えています。人類の歴史でいえば、いまという時代はかつての農耕革命と産業革命に続く大きな転換点なんです。地球規模での人口増加、資源の大量消費、自然環境の異変など私たちが直面している状況は、もう上に向かって成長や拡大を目指すのではなく横軸へ、持続的な循環社会へと進むべきだと方向を明確に指し示していますね。

山下 どんどん経済を発展させ成長を図る上昇志向では、もう限界点が見えている。これまでとはベクトルを変え、価値観を変えなければいけない時期がまさにいまであるということですね。

河口 でも、ネガティブに捉える必要はありません。むしろ、ネガティブなものもポジティブに変わり得るんです。例えば、日本は少資源国で国土の67%は森林



河口真理子 (かわぐち・まりこ)

1986年一橋大学大学院修士課程修了(環境経済)、同年大和証券入社。
1993年より、大和総研にて、企業調査、経営戦略研究部長/主席研究員などを経て、
2010年4月より、大和証券グループ本社CSR室長。担当分野は環境経営・CSR・社会的責任投資。
NPO法人社会的責任投資フォーラム代表理事・事務局長。
サステナビリティ日本フォーラム評議員、環境ビジネスウィメンのメンバー、東京都環境審議会委員など。

です。20世紀の価値観でいえば「森しかない」わけです。ただ21世紀の価値観で捉え直せば、「森がある」となる。実際、森は、今後きわめて重要になる豊富な水やバイオマス、生物多様性の源泉です。CSRにしても、かつての利益追求型から、社会に対していかに価値を生み出すかと、企業価値の転換が軸となっています。これは、海のなかの生物が陸へ上がる時代にとげた進化に匹敵するほど、すごいことだと思えます。

山下 いまはその過渡期である、その時代に立ち会っているわけですからワクワクします(笑)。価値観の軸そのものが変われば求められる知恵も変化してきますね。

河口 あらゆる事業体のガバナンスも多様化するでしょうし、技術のあり方も変わってきますね。私は仕事柄、環境に対応した新しい技術を見せていただくことも多いんですが、



対談を終えて

普賢菩薩は、観自在

「あら〜。それ、ナバホ族の?」

部屋に入るなり、私の人差し指の指輪に目を止めた河口先輩である。不意打ちにあってたじろぐ私に、「あのね、この前、素敵なネイティブアメリカン・ジュエリーのお店を見つけたの〜。ほらほら、この店」と、何やら名刺入れをごそごそ。パワーストーン話に話が膨らんでいく……。いや、今日は、CSR、CSR。

しかし、河口先輩って、こんなに、ミーハーでしたっけ……。

学生時代、河口先輩は、とびきりのキレモノとして、後輩一同から畏れられていた。涼やかなお顔立ちに、クールな物言い、そして、どこか、遠くを見るような眼差しがとて大人びていらっした。ざらりと経済学研究科の大学院に進学されたかと思うと、ひらりと実務の世界へ。

環境問題からCSRまでのキャリアの軌跡は、思慮深謀の結果と見ていたけれど、どうもそうではなく、「あ、これ、面白そう」という直観と、「誰もやってないことをやる」、という開拓精神のなせる技のようである。社会が騒ぎ出すころには、もう、次のテーマに関心が移っている。

一橋の女性の先輩方は、本当に個性的で独立心旺盛だと思う。東大にだって進学できる成績だったけど、一橋が好きで進学し、自分でテーマを見つけて、どんどん突っ走る。単なるお勉強ができる優等生とは、一味も二味も違うのである。もしかしたらそのような知のあり方こそ、一橋を、体現しているものではないかしら……。

聞けば、ご家族、まさに一橋一家。お父様のみならず、お母様も一橋のご出身なのだそう。それに妹さんまで! 河口先輩は、唯一無二にして、一日にしてならず。

ナバホ族のジュエリーへの造詣から、ネイティブアメリカンの環境思想の話へ、「アバター」、グローバル天然資源戦略、森林管理と水資源など、話が尽きない。学問の領域を超え、実学と研究の境界もするりと超える。大人と子供が入り交じり、真剣とお茶目が交差する。

エコ素材で織られた桜色の衣に身を包み、柔らかく、すべてを包み込むような柔らかな表情が天女のように。携帯電話の待受画面には、何と、普賢菩薩の像。ヘルメス智って、東洋では菩薩界なのかもしれない。(山下裕子)

これはすごいなと思う技術も次々と開発されています。例えば、ある建設会社では、段ボールにアルミを貼り付けた組立式のダクトを開発しました。従来のスチール製と違って現場で組み立てられますから輸送時のCO2も大幅に削減されるんです。もちろん耐火性ではスチールより低いけれど、トータルで考え、こうしたセカンドベストを選択するというのも、大事な知恵だと思います。

山下 横に行く知恵とは、どうしたらみんなが幸せになるかという共生型の価値観ということですね。その意味では、女性の方が適合性が高いのではありませんか。

河口 そうだと思えます。女性はもともと男たちが狩りに出ている間に子どもを生み育て集落で共存してきました。男性に比べて柔軟だし、多面的な視点を持ちやすいと脳科学の研究から知られています。女性は企業社会で

は辺境に長く置かれていたから逆に冷静に俯瞰できるし、組織と一体になって頑張るとい価値観も持ちづらかった。傍流だったというところもあるでしょうが、どの会社もCSR部門に女性が多いというのも偶然ではないと思います。男性ももう企業戦士オンリーの視点を外していくべき時期ですね。企業人であると同時に生活者であり地域住民なわけですから、そうしたマルチな自分へと目を向けるといい。閉塞感のある時代を元気に生きられるキッカケになると思います。



One and Only One

第 27 話

作・編曲家 長谷部 徹氏



Toru Hasebe

作・編曲家 長谷部徹氏の

「紆余曲折」

「紆余曲折」の始まり

「紆余曲折」とは。岩波国語辞典（第三版）には「遠まわりで曲がりくねっていること」とある。人生に即しているなら、「変化を繰り返すため、すんなりいかない」場合の比喩として使われる言葉である。ほとんどの人の人生は、多かれ少なかれ紆余曲折するものだが、長谷部徹さんのそれは、かなり極端なものであったようだ。

現在、長谷部さんはテレビドラマや映画の音楽——業界では劇伴奏音楽（劇伴）という——の作曲家・編曲家として活躍中だ。『白い影』『ブラックジヤック』よろしく『逃亡者』『嫌われ



松子の一生』（以上、TBS系）、土曜時代劇『まっつぐ〜鎌倉河岸捕物控〜』（NHK）、『20世紀少年 3部作』（東宝系映画）……。こうした作品で、長谷部さんの楽曲に触れた方も多いはずである。だが長谷部さんの音楽家人生、最初から「すんなりいった」わけではない。

長谷部さんは、1955年3月6日、東京都中野区で生を受けた。小学校4年に進級するとき千葉に引っ越した。中学は千葉大学教育学部附属中学校、高校は千葉県立千葉高等学校。現役で一橋大学経済学部に入學した。

一橋大学を選じた理由――。

「理科があまり得意ではなく、文系学部を志望しました。東大と京大を受験するには、文系学部でも理科を2科目選択しなければなりません。それだけではなく、数学Ⅲまでカバーする必要があり、これは難しいと思いました。理科が1科目、数学もⅡBでよい国立大学。その条件で受験できる一橋にしたわけです。父親はサラリーマン。また、高校時代は高度経済成長期でしたから、よい大学を出ていわゆる大企業に就職して出世するというのが、サラリーマン家庭に育った高校生にとって、ごく一般的な志向でした。ほくもその程度の意識しかなく、一橋はごく単純な選択肢でしかありませんでした」

心の支えは、祖父の波瀾に富んだ生き方と、祖母からの「人間、何をやっても何とか食べていけるものだよ」というひと言だった。

長谷部さんが高校に通ったのは、1970年4月から1973年3月。高度経済成長の最盛期から末期にあたる時代である。入学の年には大阪万博が開催され、卒業して一橋大学に入學した年の10月には、第一次オイルショックが起こり高度経済成長は幕を閉じた。ただ、一橋大学卒であれば、オイルショック後の不況時であっても、大企業への就職はそれほど困難なことではなかった。

一橋大学は、商学部、経済学部、法学部、社会学部の4学部を擁している。その中で経済学部を選じた理由――。

「ほくにとって身近な社会人のモデルは、ほぼ父親一人だけ。周囲に法曹関係者がいたわけではなく、そのため法学部は積極的な選択肢になりませんでした。社会学部はどんなことをやっているのか、内容がよくわかっていなかった。商学部か経済学部か。商学部は実利一点張り、経済学部は天下国家を広く見ることができると感じました。イメージだけのことで、商学部と経済学部の違いがどこにあるのかきちんと理解していたわけはありません。よくわからないまま経済学部を受けたというのがほんとうのところですね」

どうやら、一橋大学入学あたりから、長谷部さんの紆余曲折は始まったようである。

「紆余曲折」の底流

長谷部さんの紆余曲折には、『底流』がある。ドラマ風に表現するなら『伏線』といってもよい。

伏線の1は、クラシックピアノ。

「ピアノは、小学校1年から始めました。あのころは、幼稚園からピアノかヴァイオリンを習う子が多かった。ほくもピアノをやりたいと親にねだり、近所のピアノ教室に通いました。ピアノは千葉に引っ越してからも続け、中学校3年の夏休みが終わるまで習いました」

長谷部さんがついた小保内恭子おほないきょうこは、当時、NHKのラジオやテレビに伴奏者として頻繁に出演していたピアニストで、門下生には芸大志望の子供も多かったという。

「男の子は4年生、5年生になるとかなり減ってきます。その中でほくは続けていたので、先生から『芸大を受けるつもりはないの?』といわれたことがあります。芸大を目指す、そしてプロのピアニストを志すためには、1日に5時間、6時間、いやそれ以上の時

One and Only One



間を練習に費やさなければなりません。しかしほくは、練習のため30分、1時間程度でもピアノの前に座っているのが苦痛でしたから、芸大受験はあまり考えなかったですね」

「芸大受験はあまり考えなかった」の「あまり」は、伏線の2に関係するので、記憶にとどめておいていただきたい。

ともあれ、長谷部さんは、中学3年の9月にピアノ教室をやめた。

伏線の2は、明治生まれの母方の祖母の存在。

「祖父は、自分の生きたいように人生を生きた人でした。実家は九十九里浜の地主。しかし、地主の暮らしが肌に合わなかったようで、曾祖父が亡くなった大正の終わりごろ、海外からオートバイを買って乗り回し、あれやこれや壮大に遊びまわっていたらしい。それで身代をつぶしてしまった。その後、画家になりたくて東京へ出てきたものの、絵では食べられません。昭和の初めですから、自動車の運転免許所有者は珍しく、バスの運転手になりました。それなりに稼いだのでしよう、次に建売住宅の仕事を始めました。そこで資金を作り、材木業に転進。材木業といっても町場



を知りました。祖父が亡くなったのは、中学2年のときです」

「生き方の多様性」ということで、祖母の存在も見逃せない。

の材木店ではなく、千葉の田舎の山を丸ごと買い取り、材木を伐り出し販売するという商売です。終戦後の資材不足のおかげでかなり儲かったようですよ」

もともと、長谷部さんの祖父は金銭に淡泊な人だったらしく、40代で隠居してしまい、悠々自適の後半生を送ったという。

「祖父の影響はあまり受けてはいないと思いますが、波瀾万丈の人生を知ることにつけ、生き方には多様性があること

を知らしました。祖父が亡くなったのは、中学2年のときです」

「高校2年のときでした。進路選択の

ことで『芸大を受けようかと思っただけど』といったところ、祖母の返事は「人間、何をやっても何とか食べていけるものだよ」という返事でした。祖父と波瀾の人生を共にした祖母ならではの人生観だったと思います」

さて、前述の「あまり」である。祖母とのやり取りでもわかるが、少なくとも長谷部さんは、高校2年の時点で芸大受験も視野に入れていた。それは、音楽の道であったかもしれないし、も

う一つの趣味であった絵の道かもしれないが、いずれにしろ芸術表現を志向する気持ちがあったのではないだろうか。そしてこれは、「生き方の多様性」とも呼べるものである。

「紆余曲折」の道程

「よい大学を出て、大企業に入社し出世する」という当初の選択理由は、もともと長谷部さんにとってあまり魅力を感じる生き方ではなかったようだ。

「入学後、勤め人として生きるより学問で生きられたらそちらのほうが面白いのではないか、と思うようになりまし

た。ただ、経済学者になるということにあまり心は動かされなかったですね」

一橋大学では、3年次からゼミに所属することになる。長谷部さんは、のちに学長となった種瀬茂教授のゼミに入ったのだが、四六時中マルクスの『資本論』を読むという講義内容になじめなかった。

「3年の夏休みにフロイトを読んでいたら、マルクスと似ていると思いました。どちらもユダヤ人だからなのか、フロイトとマルクスには通底するものがある、つまり共通性があると感じたのです。そこで興味が湧いたのが、戦前、ドイツのフランクフルトで生まれたフランクフルト学派。簡単にいうと、

マルクスの理論とフロイトの精神分析学などを結び付けて社会にかんする批判的理論を展開する学問です。このあたりを論文のテーマにしたいと考えるようになりました」

しかし、現在のゼミでそれが許容されるのだろうか。種瀬教授に相談したところ「やってみたらかまわない」ということだったのだが、結局、社会学部の南博教授の指導を受けることになった。

「社会心理学の大学院へ進もうとしたのですが、受からなかった。留年です。翌年、一橋より先に東大の大学院の試験がありました。医学系の中で精神衛生学を研究する大学院に受かり、そこからへ行くことにしました」

指導教官は、ベストセラーでありロングセラーでもある著書『甘え』の構造』で著名な、土居健郎教授。精神衛生学教室では、病院での実習や保健所へ行って精神に疾患を抱える人たちに接するなど、現場での勉強や研究が中心であった。現在もそうだが、精神疾患の治療理論や手法に定まったものはあまりなく、独自の理論を打ち立てる研究者が多数いた。また、長谷部さんが携った現場でも、自分のやっていることが有効なのかどうか疑問を感じる場面にしばしば遭遇した。

「博士課程進学に失敗したあと、土居

強したければ他学部のゼミでも受け入れてくれます。

先生にカリフォルニア大学への留学をすすめられました。しかし、自分ほんとうに今の学問を続けたいのだからかと疑問を抱き、悩んだ末に留学をやめました」

断章「一橋大学について」

「一橋は『自由な大学』でした。勉強したければ他学部のゼミでも受け入れてくれます。好きなことを好きなだけ学べる環境がありました。しかも文系なので比較的自由に使える時間を得ることができました。東大は理系だったこともあるでしょう、研究に対してストイックな学生が多かったように思います。一橋とは異なるスタンスで動いている大学。大学院の2年間でそ

う感じました。

高校時代は勉強に明け暮れていたのに、不健康な生活だったのではないかと思っていました。だから大学では運動部に入り、身体を鍛え青春を謳歌したい。いつてみれば『ちゃんとした大学生になろう』としたわけです。運動部は、漠然とグラランド・ホッケーが面白いかと思っていたのですが、入学

式の時防具に身を包みスティックを持ったアイス・ホッケー部の人に勧誘されました。その人は、高校でグラランド・ホッケーをやっていたとのことでした。『グラランド・ホッケーよりスピードがあるし、こっちのほうが絶対に面白い』と熱を込めて語ります。そのセールストークに魅かれ、スケートをやったこともない

一橋は『自由な大学』でした。勉

活だったと思います」

のに入部を決めてしまいました。体調を崩しアイス・ホッケー部は1年でやめたのですが、部員とは仲がよかったので以後もマネージャーのような形で付き合いを続けました。

一橋では、国立文化というのでしょ

うか、古きよき時代の大学生の時間の過ごし方ができました。楽しい大学生

「紆余曲折」の終焉

現在の一橋大学イノベーション研究センター長である米倉誠一郎教授とは、大学院時代の思い出がある。

「大学院のころ、米倉君と一緒にバンドをやっていました。彼は高校時代からレコーディングをしており、ギター、ベース、ピアノもできるマルチプレイヤー。歌も歌えます。ほくはベースで彼のバンドに入りました。ほくのベースを聴いた米倉君が、『長谷部、うまいじゃないか』と評価してくれました。彼にそういわれ、ほくも『もしかしたらうまいのかな』と。でも、これは勘違いでしたね」

長谷部さんが『勘違い』に気づいたのは、「アン・スクール・オブ・コンテンツポラリー・ミュージック（現・アン・ミュージック・スクール）」に入った直後のことだった。東大の修士課程



を終えたのは、1980年の3月。博士課程への進学につまずき、アメリカへの留学もやめた長谷部さんは、同年10月、アンの生徒としてベース科に籍を置いた。

「米倉君にほめられたこともあり、ちゃんと勉強してもっとうまいプレーヤーになりたかったのです。ところが、ぼくよりうまい人はたくさんいました。ことに現在、ベーシスト、アレンジャーとして活躍している有賀啓雄君などは、ぼくよりかなり年が下なのに、最初から『何を習いに来るんだよ』というくらいうまかった。他にもすでにプロ活動を行っているベーシストも多く、ぼく程度の技量ではダメだなというのが実感でした」

しかし、それほど悲観することもなかったようで、ギターやドラムスなど他のクラスの友人たちと組んだバンドでアン主催のコンテストに参加したところ、グランプリを受賞。演奏したのは、長谷部さんの自作曲であった。



「アンでは、メンバー全員を、どの科目を受講しても無料という特待生にしてくれました。」

ぼくは、アレンジ科を選びました。アレンジを習うことについてこれといったビジョンがあったわけではなく、やらないよりはやったほうがよいだろうという感じでしたね」

長谷部さんはそういうものの、この選択は、紆余曲折の道へつながっていたのである。

「アレンジ科の講師は、小六禮次郎さん。すでに一流の作曲家・編曲家として名を成している先生でした。小六さんは、講義のたびに学生へ宿題を出しました。そのため、やって来ない学生は講義に出づらくなってしまふ。人数がどんどん減っていき、最後の週になると残っていたのはぼく1人だけでした。すると小六さんは、『アシスタントをやってみないか』と喋ってくれたのです。それが、この世界に足を踏み入れるきっかけになりました」

長谷部さんは、1984年から1987年までの3年間、小六さんのアシスタントを務めた。そして独立。もち

ろん、すぐに食べられるようになったわけではない。仕事も収入も不安定な時期は、90年代初頭まで続いた。

「90年に映画の音楽をやり、その印税が91年から入ってきました。そして、92年から連ドラを担当。それがビデオ化され印税が入り、サントラも出してもらえるようになり、CDも出た。仕事と収入の両面で格好がつくようになったのは、94年ごろでしょうか。ぼくは39歳になっていました」

この年を、紆余曲折の終焉、つまり音楽家として「身の落ち着きどころが定まった年」と考えてよいだろう。

「ダメな20代、30代だったから、『このままでオレは大丈夫なのか』というも考えていました。しかし、祖父の生き方や祖母からの『人間、何をやっても何とか食べていけるものだよ』というひと言のおかげで、辛い時期でも過度にストレスをためることなく自分を保ってやってこられたのだと思います」

取材者も、長谷部さんのこの言葉にうなずいた。



◆長谷部 徹 (はせべ・とおる)

作・編曲家。

1955年東京都中野区生まれ。

1977年一橋大学経済学部卒業。

1980年東京大学大学院医学系研究科

(精神衛生学教室) 修士課程修了。

「劇伴は、注文に応じて曲を作ります。どんな注文にも対応できるプロフェッショナルでなければ仕事にならない。その一方でぼくは、メロディであったりアレンジの仕上げがだったり、細かいところが気になります。そうしたところを手抜きせず、自分が満足できるまで丁寧に作る。それによってぼくらしい曲が生まれ、ひいては作品として評価されることになるのだと思います」

One and Only One



長谷部氏自らがジャケットのデザインを手がけたアルバム『STRAIGHT 2 HEAVEN』



ガーデニング

草むしりは格好の気分転換

タイトルを格好よくガーデニングとはしてみたものの、それほどこだわりのあるわけではなく、要するに実態としては土いじりか草むしりといったほうが正しい。

18歳で上京し一人暮らしをはじめてからずっと集合住宅暮らしであった。それが数年前から戸建に住むことになり、小さいながらも地面に囲まれる生活となった。その直後、予期していなかった問題に直面した。雑草が生えるのである。当初は「雑草の生命力の強いことよ」と悠長に構えていたが、放っておくと際限なく生えてくる。やむなく草むしりをすることにした。これが、始めてみると想像するよりもずっと楽しい。手を土まみれにしながらか雑草と格闘していると、雑念でいっぱい頭が真っ白になり、集中力が高まってくるのがわかる。長時間続けていると腰が痛くなるのが欠点ではあるが、他にこれといった趣味もない私にとって、これは格好の気分転換となることがわかった。



無秩序な手入れは草木を痛めつける

こうして時間を見つけては草むしりに精を出すようになり、雑草の問題は解決した。しかし、格闘すべき雑草が減ってしまうと逆に物足りなさを感じるようになった。そこで目をつけたのが植わっている草木の手入れである。幸いなことに、わが家には木蓮、金木犀、



紫陽花、木香薔薇、椿などの木がところ狭しと並んでいる。すべて前の住人が植え、そのまま残っているものである。これが季節ごとに美しい花を咲かせる。また、水仙、ムスカリ、百合といった球根ものも何も手入れをしなくとも毎年花をつける。ただ、長らくほったらかしであったため、枝は伸び放題に伸び、球根ものも栄養不足でどう

にかこうにか生き延びているという感じであった。せつかくだし、これを手入れしようと思いついたわけである。まずは木の枝を剪定し、土に肥料を混ぜた。しかし、何の知識もなく、季節も考



えずに枝を好き放題に切り落とし結果、次の時期の花は激減してしまった。その反省から、少しずつ各植物についての情報を集め、その特性に応じた手入れをするようになった。今ではようやく以前と同様に花を咲かせるようになった。

過保護な薔薇と放任主義のトマト

こうなると、前の住人の趣味で植えたものだけでなく、自分好みの植物も植えたくなくなる。目をつけたのが薔薇である。昨年春先、ホームセンターで薔薇の苗木を、プランター用のミニ薔薇とあわせて何か買ってきて植えた。しかし、薔薇を選んだのは失敗であった。手入れが大変なのである。しばらく放っておくとすぐに虫がついて葉を食い荒らされる。肥料も適切な量を適切な時期に与える必要がある。病気にもなりやすい。手がかかるのには閉口したが、逆に手をかければそのぶんだけ応えてくれるのがあるところでもある。春から夏にかけて、毎朝カーテンを開けた瞬間にたくさんの薔薇の花が目飛び込んでくると、何ともいえない爽快感を感じる。

加えて最近熱心に取り組むようになったのがトマトの栽培である。トマトは誰にでも簡単に育てられる。お



いしいトマトをつくるには水をやりすぎではいけない。しょっちゅう水やりを忘れる私にとってこれほど好都合なことはない。しおれ始めたところ

を見計らって少しやればよい。トマト好きのわが家にとっては実益も兼ねられる。また、苗から大きくなり、花をつけ、実がなるまでのプロセスを観察し、その結果を最後に食卓で味わうのは、普段スーパーに並んだ野菜しか見ない小学生の娘にとっても貴重な経験である。今後他の野菜にも手を出そうかと思案している。

面倒くさがりで、こだわりがなく、飽きっぽい私にとっては、家のまわりを取り囲む植物たちとこれくらいの距離感で付き合うのがちょうどよい。



風刺画の世界に魅せられて

数年前のクリスマスシーズンに、サンタクロースの誕生秘話について

某新聞社から取材を受けたことがある。どうやら私が、

アメリカ力であの太ったサンタを誕生させた風刺画家の作品コレクターであることが

ばれてしまったらしい。画家の名前は、トマス・ナスト (Thomas Nast: 一八四〇—一九〇二)。

私はおそらく世界中の誰よりも、その風刺画全作品を完璧に収集し整理しているマニアなのである。

今回は、私が迂闊にもはまってしまったこの画家とその風刺画コレクションについて話をしよう。

政治風刺画家ナストとの出会い

私の研究テーマの一つに、南北戦争前後のアメリカ合衆国における「国民」の境界をめぐるポリティックスの分析がある。奴隷解放が実現し、あらゆるマイノリティに国民化の可能性が生まれた激動の時代。この時代に自由や人種平等を

希求した共和党の政治家や市井の人々の足跡を追いかけて、十年以上がたつ。一五〇年前のさまざまな史料を渉猟する作業のなかで運命的に出会ったのが、一九世紀後半に流行した絵入り新聞、Harper's Weekly (以後、HW) と、同紙で活躍する画家ナストであった。

一八五七年に刊行されたHWは、反奴隷制・親共和党を鮮明に打ち出した政治的主張で他紙を圧倒し、A3サイズの大きな政治風刺画がトップを飾る斬新な紙面構成によって、再建期の

感謝祭の晩餐』は、衝撃的だった。この画では、黒人や先住民はもちろんのこと、中国人も国民の輪の中に加えられて、人種平等のアメリカ社会が夢想されていたからである。この画を描いたのは一体誰なのか。その作者の生い立ちを調べ、ほかの作品をチェックするうち、私はすぐにその作家の虜となった。

ナストは、アメリカを代表する政治風刺画家である。フランス革命と共和主義の激動の時代にオノレ・ドミエが誕生したように、南北戦争と再建の時代にナストは宿命的に生まれた。文字の読めない民衆にも、彼の漫画は生き生きと共和急進派の政治理念を伝え、サンタクロースはもちろんのこと、共和党の象、民主党的ロバ、アンクル・サムにミス・コロンビアと、



トマス・ナスト自画像、
Harper's Weekly,
December 2, 1876.



『アンクル・サム家の感謝祭の晩餐』
Harper's Weekly, November 20, 1869.

数々の政治シンボルをアメリカ社会に生みだし定着させていった。
**全精力を傾けて作った
二二八八点のリスト**

私はいつしか、再建期研究の文脈からは離れて、ナストの作品を集め始めていた。前任校で同僚だった西洋美術史の故・若桑みどりさんが、私のコレクションを面白がってくれたのを懐かしく思い出す。

刊行された一八五七年から九九九年までの四三年間分、総頁にして四万二八八〇頁の紙面を一枚一枚めぐりながら、ナスト作品をリストアップする気の遠くなるような作業。途中めげそうにもなったが、ニューヨーク公立図書館でナストの妻サラが作成したナストの作品リストが見つかったのも励みになった。だが、数え間違いがあつたり、晩年の作品が調査対象外になっていたので、結局は全部自力で調べることになり、最終的に二二八八点の作品リストを作った。サラのリストが二二二〇なので、六八作品が追加されたことになる。ニュージャーシーにあるトマス・ナスト協会にこの作品リストを提出し、協会から感謝状をいただいたのは、数年前のこと。リンカンやグラントら政治家とも親交が深く、最後はエクアドル領事として黄熱病のため



Merry Old Santa Claus
Harper's Weekly, January 1, 1881.



(Dis) "Honors are easy,"
--- Now both parties have
something to hang on.
Harper's Weekly, May 20, 1882.

赴任地で亡くなるこの画家の波瀾万丈の生涯について、いずれまとめてみたいというのがマニアとしての私の願いである。

Love of Culture

風刺画



社会学研究科教授

貴堂嘉之

時代の息吹を伝える中心的メディアとなった。当時、中国人移民への排斥運動を研究していた私にとって、HWに掲載された『アンクル・サム家の

「直感に反した洞察の達人」に見る洞察の妙

スラヴォイ・ジジェクの快樂

ここ10年ほどスラヴォイ・ジジェクという哲学者の本を翻訳する仕事をしている。その人気の高さから彼には様々な称号が与えられてきた。有名なのは「文化理論のエルヴィス」だが、わたしが好きなのは「直感に反した洞察の達人」である。言い得て妙だとおもう。たとえば映画『サウンド・オブ・ミュージック』について、彼はこんなことを言っている。この映画はナチスに対するオーストリアの抵抗の物語であるとされているが、そのイメージ構成に注意してみれば、ファシスト的なのはむしろオーストリア（トラップ家）のほうであり（規律、大地に根付いた生活……）、ナチスには逆に（反ユダヤ主義がしばしばユダヤ人に負わせた）コスモポリタンのなデカダンスのイメージ（高級煙草、口髭……）が与えられている。明示的メッセージとそれを裏返す暗示的メッセージ。この映画は、見た目以上に反動的である……。 「あなたにとってもっともやましい快樂は？」という問いに、ジジェクが『「サウンド・オブ・ミュージック」のような、当惑するほど感傷的な映画をみることです」と答えたのも納得がいく。

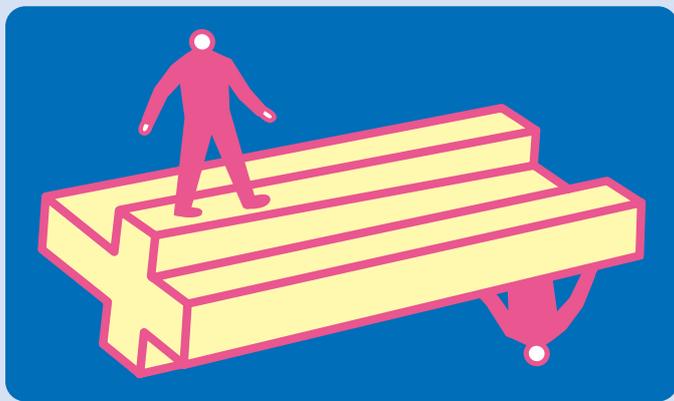
愚かな修道女のストーリー

「感傷的」といえば、まっさきに思い出されるのは、トラップ家の家庭教師をやめて女子修道院に戻ってきたマリアに向かって、修道院長が「すべての山に登れ」（トラップ大佐のことが好きならその気持ちに正直に生きなさい！）と歌う場面だろう。この場面の奇妙さに気づかせてくれたのもジジェクだった。ここでは、禁欲と自制を説いているとおもわれた人物が、実は欲望に忠実に行動せよと主張する人物であることが判明するのである。この修道院長のふるまいについては、次のような、皮肉のきいた批評があるらしい（これを教えて

くれたのもジジェクである）。『サウンド・オブ・ミュージック』は、愚かな修道女をめぐる映画である。女子修道院長が彼女を部屋に呼び、あなたはすべての山に登らねばならないなどとヒステリカルに歌い上げたりしなかったら、彼女は幸せな修道院生活を続けていけただろう……。

無垢の意味を知る人は、すでに無垢ではない

『サウンド・オブ・ミュージック』のもつこうした「猥褻な裏面」については、わたしにも思いつく例がある。注目したいのは、大佐の長女リーズルと電報配達人ロルフとの逢引の場面。われわれはここで、コミュニケーションの相手が互いに否定しあう二つの異なるレベルのメッセージを表明する事態、グレゴリー・ベイトソンのいう「ダブル・バインド」の状況に出会っていないか。あるいは、ロラン・バルトの『恋愛のディスクール・断章』に出てくる「恋するわたしは狂っている、そういえるわたしは狂っていない」というパラドクスと同型のパラドクスに直面していないか。「はくは17才、もうすぐ18才、きみの面倒をみてあげる」と申し出るロルフに、リーズルは「わたしは16才、もうすぐ17才、だからあなたが頼りよ」と初々しく応じる。しかし、この場面もよくみるとおかしい。リーズルは「わたしって無垢なの」「男のひとのことなんてなにも知らない」と歌うが、そのときの彼女は、男の扱い方を心得た女以外のなものでもない。彼女は肩をくねらせ、流し目を送り、ロルフの腕に指を這わせ、彼の頭を撫でまわす……。矛盾しあう言葉と身振り。彼女は、いつていることとは別のことをやっている。そもそも「無垢」という言葉を使えるひと、その言葉の意味が分かるひとは、無垢でないことがなにを意味するか分かっているひとであって、その意味でそのひとはもはや本当に無垢とはいえない。われわれはリーズルに向かってこうやってみたい誘惑にかられる。「わたしは無垢である、そういえるあなたは無垢ではない」。



『操り人形と小人
キリスト教の倒錯的な核』
スラヴォイ・ジジェク／著
中山徹／訳 青土社刊
定価：2,520円（税込）
2004年11月15日発行



『オペラは二度死ぬ』
スラヴォイ・ジジェク、
ムラデン・ドラール／著
中山徹／訳 青土社刊
定価：2,940円（税込）
2003年6月10日発行



『全体主義
観念の(誤)使用について』
スラヴォイ・ジジェク／著
中山徹、清水知子／訳 青土社刊
定価：2,940円（税込）
2002年6月10日発行



『大義を忘れるな
革命・テロ・反資本主義』
スラヴォイ・ジジェク／著
中山徹、鈴木英明／訳 青土社刊
定価：5,040円（税込）
2010年3月10日発行



地球の風

in Ishikawa

地域の風

蔵のご神木である
樹齢約300年のクスノキが生える庭。

伝統とは革新の連続だ！ 390年の歴史を誇る 蔵元の結論

それは本能寺の変の翌年だった

本能寺の変があった翌年の1583年（天正11年）に、前田利家公のお国替えのお供をして尾張の国から加賀の国へ移住してきたのが、神谷家の先祖である神谷内屋仁右衛門でした。神谷内屋という名乗りから前身は武士だったという説もありますが、420年以上前に殿様専用の酒造りをする職人として金沢にやってきたのです。尾張の国から加賀へは多くの職人が移住しており、金沢城のそばに「尾張町」という地名が残っているほどです。

当時は、神谷内屋という屋号だったわけですが、390年ほど前に前田家3代目の殿様である前田利常公から「谷内屋」という屋号と、加賀の国の「加賀」とおめでたい「鶴」を併せた「加賀鶴」という酒銘を拝受しました。以来、時の当主である谷内屋孫兵衛を「やちや酒造」の初代蔵元として、「加賀鶴」を造り続けているわけです。前田利常公は学問や学芸に心血を注ぎましたから、金沢の伝統文化がここから萌芽したとされています。それに伴ってお酒の消費量も増え、当時の金沢城下には、100軒以上の酒蔵があったといわれています。

実は、1815年（文化12年）に大衆免大火と呼ばれる大火があつて、残念ながらそれ以前の詳しい資料類のすべてが焼失してしまいました。しかし、大火の後に加賀藩12代目藩主の前田齊泰公より拝領した揮毫は残っており、前田家との緊密な関係が偲ばれます。前田家は現在18代目の前田利祐氏がご当主で親しく交流していただいています。私も神谷内屋から数えると同じ18代目に当たります。なお、庭にあるご神木のクスノキの大きさは樹齢約300年で、石川県でも三本の指に入る巨樹だそうです。クスノキが生息する北限に近い金沢の地で火災にも負けずに、よく大きく育ったものです。

江戸時代の香りを色濃く残しているのが、再建された酒蔵です。カンナ跡が力強く残る「ちょんな削り」といわれる独特の表面仕上げが特徴で、母屋も典型的な商家の面影を残しています。金沢らしい建築物として文化庁登録有形文化財に指定されました。

こうした環境で生まれ育ったものですから、何となくではあります。がゆくゆくは家業を継ぐものと考えていました。

一橋大学の ロマネスク様式の建物に惹かれる

商売をやるのなら一橋大学がいい。こんなふうに思っていました。それは、高校の先生がそんなことを話しているのが頭の片隅にあったからです。さらに、受験雑誌でロマネスク様式の建物や緑豊かな一橋大学のキャンパスの写真を見て、「大学はこうでなければ……」

やちや酒造株式会社
代表取締役社長

神谷昌利氏





左/ミニ酒蔵では、自分のためのオリジナル日本酒を造ることができる。

と大感激。夢をふくらませて受験戦線に参入しました。高校2年生のときのことでした。

一橋大学の入学試験では記述式の問題が多いので、2年時からそれを意識して勉強を始めました。1次試験は英語と数学。2次試験は5教科ですが、1次試験に受からなければ、「せっかくの勉強が無駄になってしまふ」と思って、あまり得意ではなかった英語力の強化に励みました。それだけに、1次試験に合格したときは飛び上がるほど嬉しかったものです。

母親が先代社長で、私は4人姉弟の末っ子長男。3人の姉は1人が大阪、2人が東京の大学に行っていましたので、私が東京に出ることには反対する人は周りにまったくおりませんでした。なお、東京に越した当初は、2人の姉と同居していました。

学生時代は一応真面目な学生でした。ゼミは、中村忠先生の会計学ゼミ。定員が15名のところに応募者が30名でしたから、面接では緊張しました。部活は将棋部とゴルフ部。将棋部で日本武道館の大会に参加したのが印象に残っています。また、「大学に行く!」と言っては、雀荘によく行ったものです。雀荘の名前が「大学」だったので。お酒は?という酒屋の息子です。雀荘は飲めないわけはありません。なにせ子供のころのおやつは、酒粕を焼いて食べていましたから。

いざ就職を考えると、時期になると、世界を相手に仕事をしたという気持ちと家業を継ぐという考えとのせめぎ合いがありました。しかし、結局は卒業後に商社に就職しました。

人事課時代に採用した2名の一橋大学出身者は、現在常務執行役員になっています。OBとしてはもちろんですが、会社としても一橋大学生を高く評価していたのです。退職を決めた25年前には、女性スタッフと

2人で年商60億円ぐらいあげていましたから、会社を辞めて家業に就くのには未練がなかったといったら嘘になります。そんな思いを振り切つての帰郷でした。

観光都市金沢の地の利を生かした新しい試み

1598年(慶長3年)の醍醐の花見では、豊臣秀吉公が全国から献上された銘酒のなかで加賀の酒を第一番と絶賛しています。しかし、このころ日本酒には厳しい時代が続いています。赤ワインブーム、焼酎ブームと続いて大打撃を受けました。かつては金沢酒造組合に23歳が所属していましたが、現在では金沢周辺を含めて5つ、市内に3つしか酒蔵はありません。ようやく最近になって、日本酒は見直されてきました。

私は、焼酎が流行ったところに実家に戻りました。日本酒にとっては、逆境そのものだった時期です。やがてバブル期になって業績が回復。今度は一転して人手不足になりました。そのため、県外への進出が思うようにいかず苦労したものです。現在は全国に進出していますが、小さな蔵ですから生産量は限られています。それでも少しずつですが、海外へも輸出しています。

家業を継いで思うのは「伝統とは革新の連続だ」ということです。企業30年説がありますが、ゴーイング・コンサーンたるには、革新が不可欠なのです。やちや酒造では、20年前に純米酒製造へと舵を切りました。日本酒が、特級、1級、2級と分類されていた時代に、純米酒製造に力を入れ始めたのです。それによ



地球の風
地域の風
in Ishikawa



って、販路も拡大しました。今後も純米酒を中心に据えてやっていきたいと考えています。日本酒に関心を深めていただくために酒蔵見学、酒造り体験、オーダーメイドの酒造りなども行っています。これがひらめいたのは、2000年（平成12年）のことです。金沢は観光の町ですから、築200年の古くて特徴のある建物を生かして酒蔵も観光地化を進めたいと思います。

酒蔵見学は、文字どおり酒造工程を見学し、剛き酒コーナーで試飲してもらいます。海外からの見学はアメリカ人だけで、年間70回以上、約1000人になります。ほかにフランス人などのヨーロッパ人の見学者は多いですが、案外アジア人は少ないです。

夏場にも酒造り体験ができるように、大きな冷蔵庫のような「ミニ酒蔵」を作りました。酒造りの一連の工程を1日で体験し、3週間後に日本酒ができ上がり、絞ってのお酒をお飲みいただけるようにしています。

「ミニオーダーメイド酒造り」では、「原料米と精製歩合」「使用酵母」、純米酒、大吟醸などの「お酒の種類」、旨口、辛口などの「お酒の味」などを自分で選べるようにしました。もちろんオリジナルラベルも作れます。オーダーメイドは100リットルタンクを使用し、一升ビン換算で約30本と通常の50分の1のスケールです。これが手頃だったのかもしれない。お祝い事などの際に注文をいただいています。もつとも、試験場からの新しい品種の米や酵母による試験醸造の依頼も多いですが……。

杜氏を社員にすることで

酒造ノウハウを蓄積

お酒は生き物ですから、同品質のものを安定供給す

るのは難しいものです。杜氏が酒を造りやすいような環境づくりが私の役割といえます。ちなみに昔は、杜氏は季節限りの出稼ぎ職人でした。経営効率や費用対効果でいえば優れているかもしれないませんが、このスタイルでは酒造の根幹となるノウハウの蓄積ができません。そこで現在では、杜氏も社員にしています。酒造りは冬場の仕事ですから、杜氏は夏には暇になってしまいます。酒造り体験やオーダーメイド酒造りは、夏場の仕事づくりでもあったのです。

お酒の味は、かつては淡麗辛口が流行りました。しかし、それだと焼酎との差別化が難しくなります。また、最近ではその反動からか味のある日本酒が、評価されるようになってきました。こうした流れを読みながら、次の年の売れ筋を予測して冬場に日本酒を仕込むわけですから、日本酒造りは難しいのです。また、酒造りは米作りで決まります。そこで、近隣の農家に「三谷やちや部会」を結成してもらい、酒造好適米「五百万石」「石川門」を栽培してもらっています。酒米の磨き加減は磨き過ぎず味わいが残る、ほどよい磨き加減が重要です。やりがいは、やはり「美味しい」と飲んだ人が言ってくれるのを聞くことです。

日本酒ときどき水

日本酒の新しい飲み方も提唱しています。10年前にホテルでのパーティーに参加したときのことです。ビールで乾杯をした後で、私は当然日本酒を頼みました。ところが、周りの人は、みんな焼酎を飲んでいました。そこで、お酒をつぎに回りながら理由を聞くと、「日本酒は度数が高い」「翌日残る」という人がかなりいまし



酒蔵に隣接するショップでは、やちや酒造の銘酒と酒を楽しむための器類を販売している。



剛き酒コーナーでは、ここで造るすべての酒が試飲できる。

神谷氏は、日本酒離れを防ぐ活動の一環として、体に良い日本酒の飲み方「和らぎ水」の普及活動を行っている。写真下は海外からの観光客向けに行っている酒蔵見学のチケット。



前田家13代当主
前田齊泰公
自筆の書。



地球の風
地域の風
in Ishikawa

た。確かに、日本酒よりアルコール度が高い焼酎はお湯割り、水割りといった飲み方をしますから、実質度数は低くなります。

ある時、茶屋の女将さんに「あなたは日本酒をよく飲むから、お水も飲みなさい」と言われたことがありました。これがヒントになって、日本酒と水を交互に飲むという飲み方がひらめいたのです。考えてみれば、洋酒にはチェイサーがあります。

実際にはどうなのか？ 自分で人体実験(?)をしてみました。日本酒を飲んでから水を飲むと、口の中が洗われて改めて美味しく飲むことができます。何よりも、翌朝の食事を美味しくいただくことができました。水を飲むことで血中アルコール度が下がり、酔いの速度が緩やかになります。さらに、普段より多く飲んで翌日はあまり残りません。美味しくお酒を飲みながら、深酔いすることがないというのが印象的でした。

これに力を得て積極的にアピールすることになりました。一般公募でこの水を挟む飲み方を「和らぎ水」と呼ぶことにしました。日本酒造組合中央会では、「和らぎ水」のすすめとして、「日本酒ときどき水が上手な飲み方。気分スッキリ、深酔いしません。」とアピールしています。

世の中の流れを感じ、先を読む楽しさ

現代はストレス時代です。病気の原因・起因もストレスが多いようです。「酒は百薬の長」といわれつつも、過度の飲酒は生活習慣病を予防することがわかってきました。飲んだ人が健康になるような酒造りをしてい

きたいと思っています。

変革を続けていくのに重要なのは、世の中にアンテナを張り巡らせていくことです。それも同業者ばかりでなく他業界の人とも積極的に接することが必要になります。デフレ時代にどう改革を進めていくか？ 今、次の一手を模索しているところでは、日本酒の品数を整理して、蔵元としてのピントがはっきりするようにしたいですね。

なお、新しい試みとしては、日本酒やブランドで造った梅酒などの商品をラインナップしました。今後は、輸出にも力を入れていきたいと考えていますし、ネット活用の新商売展開も面白いと思います。世の中にはさまざまな流れがありますから、先を読む楽しさがあるのです。

ところで、地方にいと一橋大学の顔が見えてきません。高校生を含めると地方の人たちに一橋大学をアピールする必要があるでしょう。目に触れる機会が少ない大学には、高校生も受験しようという気にはなりませんから……。



◆神谷昌利 (かみや・まさとし)

1977年商学部卒業。約6年間の商社勤務を経て、家業を継承する。

石川県酒造組合連合会副会長、石川県産酒米「石川門」を使った酒造りを推進する「酒米石川門の会」の副会長などを務める。2010年如水会金沢支部長に就任。

在学生の保護者

27名 (1,530,000円)

稲葉千恵 様	戸塚 修 様
大石圭太 様	永田浩司 様
岡本政廣 様	古澤俊之 様
岡本正善 様	松尾全人 様
尾野勝美 様	水内啓司 様
尾見仁一 様	水野陽介 様
柏本雄幸 様	宮崎 潔 様
河崎信敏 様	茂木秀之 様
白井保二 様	山田秀司 様
須釜清治 様	山ノ上利充 様
田浦政孝 様	吉村 学 様
月森博基・直子 様	他4名

卒業生のご家族・一般の方

6名 (5,513,000円)

佐々木なつ子 様	岡部洋平 様
中村智子 様	後藤 勲 様
岡崎健一 様	他1名

企業・法人等

27団体 (124,844,000円)

アイティシージャパン株式会社	様
E A E株式会社	様
カトウエアシステム株式会社	様
サントリーホールディングス株式会社	様
J F Eホールディングス株式会社	様
社団法人如水会	様
新日鉄ソリューションズ株式会社	様
住友ゴム工業株式会社	様
ゼネラルエンジニアリング株式会社	様
社団法人全国信用金庫協会	様
ソニー株式会社	様
大成建設株式会社	様
武田薬品工業株式会社	様
株式会社円谷エンターテインメント	様
株式会社東京會館	様
東京官書普及株式会社	様
トータル建設株式会社	様
株式会社日本総合研究所	様
農林中央金庫	様
有限会社羽鳥電気商会	様
一橋大学消費生活協同組合	様
富士通株式会社	様
Berge y Compania S.A.	様
堀内電機株式会社	様
森ビル株式会社	様
他2団体	

本学役職員

29名 (3,254,000円)

小久保雅正 様	瀬川哲郎 様	中村英剛 様	藤永 晋 様	柳沢真人 様
小島康夫 様	関根敏正 様	中村隆一 様	藤目琴実 様	八幡太郎 様
小西直也 様	高井二矢 様	中本甚太郎 様	二木英一 様	山内喜彦 様
小林昭夫 様	高瀬博之 様	中安雅文 様	淵上玲子 様	山口恒男 様
小林一貴 様	高野 博 様	中山晴之 様	船越賢哉 様	山口利夫 様
小林博一 様	高橋哲雄 様	永山 壽 様	船崎 裕 様	山崎一寛 様
小林正直 様	高橋信行 様	那須俊彦 様	古川敬之 様	山田成人 様
小林芳男 様	高橋正明 様	並木育朗 様	古川道夫 様	山田達也 様
小松美枝 様	高見沢昌彦 様	成田竜也 様	古澤 宏 様	山田雄一 様
小峰 隆 様	滝沢 豊 様	西川敏明 様	古谷昌彦 様	山本 誠 様
斎藤英一 様	竹内敏男 様	西永健三 様	古谷九八郎 様	山本倫弘 様
齋藤誠一郎 様	武田晴雄 様	西野 安 様	北條 潔 様	山本悠一郎 様
斎藤英秋 様	竹村恭輔 様	西村行功 様	穂刈 公 様	山本由夫 様
斎藤元英 様	武本宜久 様	新田信行 様	堀田武靖 様	横澤祐介 様
佐伯 進 様	橋 弘真 様	入道正久 様	堀田博司 様	横須賀俊六 様
酒井孝平 様	建部克史 様	丹羽達哉 様	本城和紀 様	横田希代子 様
坂神孝明 様	田所亮子 様	沼田勝意 様	真家琢治 様	横山昇一 様
坂元清信 様	田中慎造 様	根崎修一 様	増淵義典 様	横山尚佳 様
阪本久大 様	田中敏夫 様	野口達司 様	松下樹博 様	吉田篤司 様
櫻井邦昭 様	田中正昭 様	野口英彦 様	松島誠一 様	吉田和司 様
佐々木一成 様	田辺大地 様	野々垣 勇 様	松田健志 様	吉田 満 様
佐々木房吉 様	田畑 正 様	野間弘之 様	松本 卓 様	吉田幸夫 様
佐瀬隆夫 様	玉川越三 様	橋田隆雄 様	松本 毅 様	吉田陽吾 様
佐藤恵美子 様	玉木 勝 様	羽柴 駿 様	松山雅胤 様	吉本清志 様
佐藤安紀 様	田村啓一郎 様	長谷川 晨 様	萬納宏俊 様	米谷憲一 様
澤登正樹 様	多和田 満 様	長谷川正義 様	三浦 博 様	米山司理 様
椎名幸司 様	千葉金助 様	秦 哲也 様	三浦義樹 様	刘 元春 様
塩田和弘 様	塚本眞索 様	笹崎孝文 様	三上 魁 様	若岡邦和 様
篠田健三 様	辻岡公夫 様	笹野友夫 様	三上幸彦 様	若菜重一 様
篠宮 清 様	土屋 久 様	服部みどり 様	三神正博 様	渡辺吉郎 様
四分一 直 様	鶴来谷 勲 様	花木亮二 様	三崎洋一郎 様	渡辺淳平 様
澁谷榮介 様	鶴田剛平 様	花田一憲 様	水野隆喜 様	渡辺佳夫 様
志水三輪子 様	鶴田雅男 様	馬場 昭 様	溝越清隆 様	綿村 惇 様
寿福未来 様	手塚広一郎 様	馬場佳一郎 様	三橋秀方 様	詠帰会 様
莊 雅行 様	徳田誠一 様	馬場 肇 様	峯村敏裕 様	一紫会 様
白井敏三 様	戸倉敏雄 様	林 義光 様	三村秀樹 様	(昭和17年予科入学) 様
白築忠明 様	渡仲匡史 様	原 達也 様	宮内英貴 様	昭和37年 悠々会 様
未延幸辰 様	富谷時義 様	比嘉理恵 様	宮川 康 様	昭和37年卒 様
杉野雄次郎 様	富安弘毅 様	久田 修 様	宮澤吉彦 様	Sクラス有志 様
杉山元章 様	豊本信一 様	平岡哲朗 様	宮本清彦 様	昭和37年卒T組 様
菅 裕一 様	鳥越干城 様	平賀茂孝 様	村上英志 様	市原昌三郎先生を偲ぶ会 様
鈴木公郎 様	内藤忠頭 様	平松重宏 様	村瀬 真 様	事務局 様
鈴木真吾 様	中田協三 様	廣島昭三 様	邑田清志 様	他66名
鈴木隆史 様	永田永寿 様	広瀬郁夫 様	村山拓士 様	
鈴木俊之 様	中戸川 勉 様	廣瀬信幸 様	室 孝幸 様	
鈴木 仁 様	永利新一 様	廣田守慶 様	守口 毅 様	
鈴木正元 様	中西洋一 様	福田茂則 様	森田房雄 様	
鈴木亮介 様	中野俊彦 様	福田實男 様	八木修治 様	
住田邦亜 様	中村恒雄 様	福田潤弥 様	八木政幸 様	
清野 謙 様	中村友紀 様	福田達夫 様	安岡正文 様	

一橋大学基金へのご協力、心より御礼申し上げます。

卒業生、在学生の保護者・ご家族の方をはじめとした皆様からご寄付をいただき、2010年5月末現在で、総額約28億8,000万円（入金済分）に達しました（うち2億円は、創立125周年記念募金より繰り入れ）。この場をお借りし、皆様のご協力で厚く御礼申し上げます。

ご寄付をいただきました方々へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では、2010年2月1日から2010年5月末日までの間にご入金を確認させていただいた方を公表させていただきます。公開不可の方、本学役職員につきましては掲載しておりません。また、ご寄付者で万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮でございますが、基金事務局までご連絡ください。

ご寄付をいただいた方すべての皆様を「一橋大学基金寄付者芳名録」に記し、一橋大学の歴史に末永く留めさせていただきます。また、30万円以上（法人100万円以上）のご寄付に關しましては、ご芳名を本館設置の「一橋大学基金寄付者銘板」に記させていただきます。



なお、募金目標額は100億円となっております。皆様の一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

ご寄付のお申し込みについて

● お手紙・ファックスまたはお電話で、ご住所とお名前をお知らせください。基金事務局より、ご案内、寄付申込書および払込用紙をお送りいたします。

● 一橋大学基金ホームページより、クレジットカードによるお申し込みも受け付けております。トップページ上方の「ご寄付のお申込み」メニューからお進みください。

一橋大学基金ホームページ

<http://www.kikin.ad.hit-u.ac.jp/>

如水会会員証カードをお持ちの卒業生の皆様へ 分割ご寄付のご案内

一橋大学基金では（社）如水会と連携し、如水会会員証カードによる分割ご寄付の受け付けをしております。

お申し込みいただきますと、如水会会員証カードから定期的に自動払い込みにてご寄付を頂戴することとなり、お振込の手間を省くことができます。

また、ご寄付の回数は、年1回（2月または8月）と年2回（2月および8月）よりお選びいただけます。如水会会員証カードをお持ちの卒業生の方はぜひご検討ください。

詳しくは、ホームページをご参照いただくか、下記までお問い合わせください。

【お問い合わせ先】

一橋大学基金事務局
〒186-8601 東京都国立市中2-1
TEL：042-580-8888
FAX：042-580-8889
E-mail：kikin@ad.hit-u.ac.jp

【ご寄付者ご芳名】 ※五十音順に掲載させていただきます。

卒業生

431名・7団体（56,286,291円）

ご寄付金額（累計）

100万円以上

20名・1団体

有吉 弘 様
小形滋彦 様
川口恭弘 様
小原 順 様
鈴木 茂 様
鈴木崇司 様
住田笛雄 様
立原俊助 様
土山常男 様
羽賀昭雄 様
土方 覚 様
堀地史郎 様
卷島佳男 様
溝口俊一 様
宮島信明 様
宮本克彦 様
三好正晴 様
山之内茂樹 様
和田 彰 様

昭和31年入学N組喜久会（二木会）様
他1名

50万円以上
100万円未満

12名

飯田秀郷 様
奥村一郎 様
川崎正己 様
櫻井 榮 様
櫻井安彦 様
鈴木道郎 様
寺田佳正 様
松永正大 様
宮田雄幸 様
若松第一 様
他2名

50万円未満

399名・6団体

青木貞男 様
浅野 徹 様
蒔 勇二 様
阿字地 謙 様
東川 洋 様
麻生照夫 様
阿部源次郎 様
天野 正 様
雨宮愼吾 様
鮎川真昭 様
新井浩之 様
新井 誠 様
有賀英樹 様
有賀 盈 様
安藤秀男 様
飯尾文郎 様
飯田達也 様
五十嵐誠二 様
池田義治 様
石井 徹 様
石川 威 様
石樽昌樹 様
石下志郎 様
石田敏博 様
石田宏樹 様
石田政明 様
石附 弘 様
石橋一雄 様
磯崎 幸 様
市川康夫 様
市毛 茂 様
伊藤 彰 様
伊藤一昭 様
伊藤 均 様
稲葉四郎 様
井ノ川 朗 様
井橋清一 様
伊原 巖 様
井元義夫 様
岩渕正明 様
岩本文夫 様
上田英一 様
上原敏夫 様
植松省自 様
宇佐川直幸 様
歌川 毅 様
内田清人 様
内野将治 様
内海和之 様
浦沢武士 様
江川 正 様
江口一元 様
江口 隆 様
江藤修治 様
遠藤勝己 様
遠藤三夫 様
大石克洋 様
大神宜也 様
大坂一義 様
太田道彦 様
大塚康雄 様
大貫俊一 様
大堀一充 様
岡本敬一 様
岡本 正 様
荻野隆史 様
荻原勝年 様
落合大祐 様
小野隆史 様
尾身幸次 様
風岡 明 様
片山研一 様
加藤幹雄 様
金井文彦 様
金子一郎 様
金子恵美 様
金子博臣 様
兼田武剛 様
上内義人 様
上柳好孝 様
蒲原国弘 様
川井啓史 様
川井 俊 様
川口 卓 様
川口 均 様
河西幸穂 様
川端 茂 様
菊池明雄 様
北村俊裕 様
木村洋一 様
熊谷寿雄 様
熊谷靖公 様
熊野順祥 様
熊本康二郎 様
糸田直行 様
栗田正樹 様
小泉 璋 様
高着敦史 様
古賀暢之 様
五ヶ山 淳 様



銘板色

【ブロンズ】

個人：30万円以上

法人：100万円以上

【シルバー】

個人：100万円以上

法人：500万円以上

【ゴールド】

個人：1,000万円以上

法人：5,000万円以上

【プラチナ】

個人：3,000万円以上

法人：1億円以上

（金額は累計）



平成22年度 一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館 共同企画展示のお知らせ

附属図書館では、本学のさまざまな所蔵資料を公開することを目的として、平成13(2001)年に公開展示室を開設しました。以来、常設展示にて本学の歴史や所蔵資料を紹介するとともに、毎年11月の一橋祭の時期に企画展示を開催しています。

本年度の企画展示は、慶應義塾図書館との共催により開催する運びとなりました。「大江戸商売繁盛記―所蔵貴重資料から―」と題し、一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館が所蔵する日本の商業史・経済史に関する貴重資料を皆様にご紹介いたします。本学の誇る札差関係資料や大伝馬町長谷川木綿店古帳のほか、米の流通や海運に関する資料、古地図など、普段は展示に供されることのない資料が一堂に会します。この機会にぜひご覧ください。

また、期間中に講演会とギャラリートークの開催も予定しております。

日時・会場等は下記のとおりです。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

平成22年度一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館共同企画展示 「大江戸商売繁盛記―所蔵貴重資料から―」

期間：平成22年11月4日(木)～11月19日(金)
※11月13日(土)は閉室
入場：9時30分～16時30分(閉室17時) 入場無料
会場：一橋大学附属図書館公開展示室
(西キャンパス 時計台棟1階)
主催：一橋大学附属図書館・慶應義塾図書館

なお、内容・日時等に変更が生じる場合がありますが、その他詳細と併せ、附属図書館のウェブサイト(<http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/tenji>)にて随時ご案内申し上げます。
お問い合わせ先：学術情報課 学術・企画主担当
(Email : kikaku@www.lib.hit-u.ac.jp)
Tel : 042-580-8252 Fax : 042-580-8232



新版浮絵江戸日本橋市中之図
(慶應義塾図書館所蔵)



『指引帳』

木綿問屋仲間に発生した重要事項を記録した史料。17世紀後半から19世紀前半に至るまで、行司(当番)が交替で書き継いだ。

札差仲間の文書類を保管した箱

火事など不測の事態が生じた際に持ち出せるよう、背負える構造になっている。



仙台蔵米切手

諸藩は売却した蔵米の保管証書として蔵米切手を発行した。この切手の場合、所持人は仙台藩から米20俵を受け取ることができた。



『江戸買物独案内』(文政7年(1824年)刊)

江戸の商店を職種別に分類し、商人の名前や所在地を掲載した江戸時代の買物ガイドブック。

10月24日、初めてのコンサートを開催します 兼松講堂にレジデントオーケストラが誕生。

2010年6月3日佐野書院にて調印式が行われ、「国立シンフォニカー」と一橋大学が協定を締結。「一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ」が誕生することになりました。2010年は一橋大学創立135周年、国立移転80周年の年にあたります。この記念すべき年に「一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ」による第1回のクラシックコンサートを開催するはこびとなりました。



コンサートホールとしての兼松講堂

一橋大学の象徴的な建物である兼松講堂は、2003年4月から2004年3月にかけて、本学の同窓会組織である社団法人如水会の働きかけによる募金で大改修工事が行われ、77年ぶりに本来の美しさを取り戻しました。国の登録有形文化財にも指定されている兼松講堂は、“隠れた”名コンサートホールとしても親しまれており、これまで多くの本格的なクラシックコンサートが開催されています。



宮城敬雄氏と国立シンフォニカー

一橋大学管弦楽団OBである宮城敬雄氏は、卒業後会社勤めを経て、経営者となりました。結婚式場、クリスマスショッパ事業を成功へと導いた宮城氏



は、子供のころからの夢が忘れられず50歳にして一念発起、プロの指揮者を目指しました。1996年には自前の楽団を創設して指揮者デビュー、2000年からはヨーロッパ各国を代表する楽団を指揮してきました。

「国立シンフォニカー」は、指揮者宮城敬雄氏のもと結成されたオーケストラです。東京フィルハーモニー交響楽団に在籍するメンバーの首席奏者18人が核となり、2007年より活動を開始しています。

一橋大学兼松講堂レジデントオーケストラ 国立シンフォニカー 創立記念コンサート

開催日：2010年10月24日（日）

開場：13:15

開演：14:00

ゲストピアニスト：オリビエ・トリエンドル

演奏曲：ブラームス「大学祝典」序曲 op.80

シューマン ピアノ協奏曲 イ短調 op.54

ブラームス 交響曲第1番 八短調 op.68

料金（税込）：P席（プレミアム）6,500円/S席 4,500円/A席 3,000円/B席 2,000円

チケットのお求め・お問い合わせ：高輪プリンツヒェンガルテン

03-3443-1521（10:00~20:00/月曜定休）

※未就学児童のご入場はご遠慮ください。





2010年8月15日 BS日テレにて、 一橋大学を紹介する番組を放映します

一橋大学では、大学の活動を全国のみなさまに幅広く知っていただくために、
紹介番組を放映することになりました。

番組は、BS日テレの「大学を知ろう ～知の道しるべ～」というシリーズで、
本学は8月15日(日)午前11:00～11:30の回で放映されます(初回放送7月18日の再放送です)。

番組では、大学の概要や同窓会組織である如水会の紹介のほか、
本学の教育の特長の一つであるゼミナールを取り上げ、
社会で活躍する卒業生と当時の指導教員の対談を交えながら、
ゼミナールに真剣に取り組む学生たちの様子などをドキュメンタリー形式で描いています。
ぜひご覧ください。

番組Webサイト <http://www.bs4.jp/guide/entame/daigaku2/>

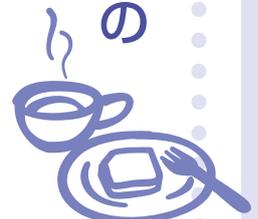


2010年開催の卒業式、
入学式、ホームカミングデーでは、
「一橋大学公式記念焼き菓子」の
販売を行いました。
2010年8月に開催される
オープンキャンパスでも、
同商品の販売を予定しています。
パッケージは
一橋大学のロゴで飾られ、
中身は、地元国立が誇る
フランス菓子の名店
「レ・アントルメ国立」の
高級焼き菓子のセットです。



1,000円セット：焼き菓子5種
1,500円セット：焼き菓子7種 2つのセットを販売しました。

「一橋大学公式記念焼き菓子」の
販売を実施しました



知らない風景



第2回

普段見なれているものの中にも、見たことのない、知らない風景があります。大学の中で見落としてしまいがちな、あるいは見る機会がない風景をご紹介します。第2回は、兼松講堂のシャンデリアです。

シャンデリアの化粧直し

怪物の卵にも、

異星人の乗り物にも似た物体が、

天井から降りてくる。

合図とともに、天井裏に備え付けられた

ワイヤーリールが回りだす。

緩衝材の毛布の上へ、静かに着地する。

兼松講堂では、2年に1度

シャンデリアの電球交換が行われます。

カプセル状のドームの中央に2つ、アームの先端に5つ、

計7つの水銀電球が一体となって、

シャンデリアの輝きをつくりあげています。

シャンデリアを吊るワイヤーリール。



屋根裏へと続く梯子。



舞台用ダウンライトの隙間から見える講堂内。



大電球は下方を、中電球は側面を照らす。



総勢3名で約半日を費やして、電球交換作業は行われる。



一橋大学広報誌「HQ」

〈編集・発行〉

一橋大学HQ編集部

〈編集部長〉

副学長(総務、財務、社会連携担当) 山内 進

〈編集長〉

言語社会研究科教授 坂井洋史

〈編集部員〉

商学研究科准教授 松井 剛
 経済学研究科教授 水岡不二雄
 法学研究科准教授 屋敷二郎
 社会学研究科教授 阪西紀子
 国際企業戦略研究科准教授 大上慎吾
 経済研究所教授 青木玲子

〈外部編集部員〉

有限会社イブダワークス 吉田清純

〈印刷・製本〉

図書印刷株式会社

〈お問い合わせ先〉

一橋大学企画・広報室広報担当

〒186-8601 東京都国立市中2-1

Tel : 042-580-8032 Fax : 042-580-8016

http://www.hit-u.ac.jp/

koho@ad.hit-u.ac.jp

※ご意見をお寄せください。

一橋大学企画・広報室広報担当 koho@ad.hit-u.ac.jp

※本誌掲載の文章・記事・写真等の

無断転載はお断りします。

●広告掲載お問い合わせ先
 一橋大学企画・広報室広報担当
 TEL : 042-580-8032

編集部から

最近「ヨジラー」とか「ゴジラー」という言葉が流行っていると聞いた。朝4時とか5時に起きて、午前中から精力的に仕事を片付けてしまう人達のことらしい。さすがに4時とまではいかないが、最近は朝型の生活スタイルに変わりつつある。まあ、何のことはない。歳をとったので、朝早く目が覚めてしまうだけのことである。「年寄りには朝が早い」とは昔から聞かされてきたが、その立場になって初めて「なるほどこういうことか」と分かった。これがもう見事にぱっちり目が覚めるのである。目覚まし時計など必要ない。最初は少々とまどっていたのだが、結局開き直って仕事を夜から朝へシフトすることにした。しかし、いざやってみると、太陽が昇るのとともに次々仕事を片付けていくのは実に快適である。思えば、小学生の頃からときおり挑戦してはみたものの、一度も達成できなかった「早起き」生活だ。こんな形で手に入れるとは思わなかった。歳をとるのも悪くないものだ。(大猫)

第6回 一橋大学関西アカデミア

シンポジウム 都市の創造性

日 時：2010年10月9日(土) 13時30分開演(13時開場)

会 場：ザ・フェニックスホール

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 TEL:06-6363-0311

パネリスト：辻井 喬 詩人・作家

佐々木雅幸 大阪市立大学都市研究プラザ所長

水内俊雄 大阪市立大学都市研究プラザ副所長

田崎宣義 一橋大学名誉教授・大学院社会学研究科特任教授

町村敬志 一橋大学大学院社会学研究科教授

司 会：林 大樹 一橋大学大学院社会学研究科教授

(1) 日 時：2010年10月9日(土) 10時~12時 場所：同上
講演前に入試説明会をします。(2) 内 容：個別相談、大学案内DVD上映、大学案内等配付

(3) 対象者：関西地区の高等学校の進路指導教員、予備校関係者、高校生及びその保護者 等

第1回 一橋大学中部アカデミア

シンポジウム 今、中部企業に求められる戦略

日 時：2010年10月30日(土) 14時開演(13時30分開場)

会 場：ミッドランドホール

〒450-6205 名古屋市中村区名駅4-7-1 TEL:052-527-8500

パネリスト：沼上 幹 一橋大学大学院商学研究科教授

伊藤勝康 リゾートトラスト株式会社代表取締役社長

西浦道明 株式会社アタックス代表取締役社長

磯輪英之 株式会社ISOWA代表取締役社長

司 会：大西幹弘 名城大学経営学部教授

(1) 日 時：2010年10月30日(土) 10時~14時 場所：同上
講演前に入試説明会をします。(2) 内 容：個別相談、大学案内DVD上映、大学案内等配付

(3) 対象者：中部地区の高等学校の進路指導教員、予備校関係者、高校生及びその保護者 等

ご参加

関西アカデミアは9月27日(月)までに
中部アカデミアは10月18日(月)までに
EメールまたはFAXでお申込みください。

【関西アカデミア】E-mail: academia1009@ad.hit-u.ac.jp

【中部アカデミア】E-mail: academia1030@ad.hit-u.ac.jp

FAX: 042-580-8050 (関西アカデミア・中部アカデミア共通)

お問い合わせ先 一橋大学研究・社会連携推進課 TEL: 042-580-8058

※詳細は大学HPをご覧ください。

<http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2010/0915.html> (関西アカデミア)

<http://www.hit-u.ac.jp/function/outside/news/2010/1006.html> (中部アカデミア)